

---

# 理科室の、魔王。 ~ What A Funny World! ~

スイーツ男子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理科室の、魔王。〈What A Funny World!〉

### 【Nコード】

N3723L

### 【作者名】

スイーツ男子

### 【あらすじ】

友人の転校を機にいじめを受けるようになった少女が辛い日々を続ける中で耳にしたのは『理科室の魔王』の噂だった。半信半疑で向かった先にいたのは、頭脳明晰で破天荒な……理科室の変人！？

そんなガール・ミーツ・ボーイはいかがでしょうか？

モバゲーでも掲載中。それを改訂+推敲して、こちらでも掲載しま

す。

さくつと短めなのでお暇潰しにでもなれば幸いです。

続編公開中！

\*

ねえねえ、知ってる？この学園の七不思議のウワサのこと！

なにそれー？何か面白いのでも有るの？

それがさあ、音楽室の肖像の目が動くとかそういうベタなものもあるんだけどね……。一つだけ変なのがあるらしいんだ。

変なのって？

それがね、理科室に出るらしいんだよ。

理科室って……人体模型が夜中に動きだすとか？それもベタなんじゃ？

いやいや、そういうのじゃないんだよ！もっとこっつ具体的な

……！

えー、もう焦らさないで教えてよ。何があるの？

うん……。だからね、

「理科室には魔王がでるらしいんだって……」

\*

「……………やられた」

まただ。まただよクソツタレ。

また

机がぐちゃぐちゃじゃないか。

「女というのは……………やっぱり陰湿、かな」

わかってはいても、というよりわかりたくもないが、そう呟かざるをえない。

だって、ご丁寧に机の表面は汚さずに中に入っていたものだけを集中攻撃してあるのだから。

「これ、お気に入りだったのになあ……………」

汚されたペンケース。買い直そうと思えばいくらでも買い直せる。

が

「っ……………思い出のやつだって……………知ってて……………」

締め付けられるように苦しい胸からは、弱々しい言葉しかでてこない。

それは身体的な痛みではなかった。

心を、

えぐって、えぐって、えぐりまくった最後に細い、だが絶対に抜けない針を突き刺されるような……

そんなむごい“苦さ”が、身体中に広がっていた。

「は……はは、自分が……自分がモテないからって……」

精一杯の嘲笑、嘲笑。こうでもしなければ自分を保てない。自我が、今まで積み上げてきた自分の中の何かが、

「壊れそうだ……あ、はは……」

それは2ヶ月前に遡る。

\*

「これ、お揃いだね」

そう言ったあなたはもういない。

「大事にしてね？私だと思って」

あなたは……遠く、海外に行ってしまった。

二年間の留学。彼女にとって、それは素晴らしい成功への希望の扉。

話を持ちかけられた時にすぐ決めたらしい。

頬を朱色に染め、興奮した様子で彼女が私にそれを報告してきたとき、私は、これから始まる地獄の日々を知らずに素直に、……本当に心から「良かったね」と言った。

一ヶ月後、送別会の日。彼女は涙を見せながら言った。

「私の事忘れないでね」「電話かけるから」「ずっと友達で居ようね」

それは嘘ではない。今も時々国際電話がかかってくる。

だが所詮、“時々”である。

「昨日ね、ホストの家族の人達と買い物に行ってきたの。みんな優しいのよ。私があれば欲しいって言ったらすぐ買ってくれてね……」

うん、うん。

彼女の話に合わせて相づちをうつていれば、そのうち国際電話の料金が辛くなってくる。

そうした場合になると彼女はいつも

「そっか、ええ、そっか、に変わりはある？」

と聞いてくる。すると私はすぐ答えるのだ。

何も変わりはない、と。

本当は大ありなのに。

\*

元来、私は友達を作るのが苦手だった。

部活にも入らず、特に愛想も良くない私はクラスではいつも浮いていた。

それは自覚している。

そんな時に私に話しかけてきたのが、……（仮にA子とする）A子だったのだ。

7

彼女はクラス委員長だった。人当たりもよく、人望もあった。

そんな彼女が私によく話しかけてくるようになったのは入学してから1ヶ月くらいたったある日。

最初は委員長としての義務感だったのだろう。あのよそよそしさが懐かしい。

……それから徐々に打ち解けていって、彼女とは友人と呼べる位の関係は築いた。

それが一年生の大体の日々。

\*

さて、こんなこと自分で言うのもなんだが……私は見た目“は”

いいとよく言われる。

“は”を強調されるのは多少イラツとくるが。

なので性格を抜きにしても男にチャホヤされることは多々あった。そこで私が無愛想に振る舞えば、“お高くとまってる”と陰からコソコソ言われるのは不本意ながら仕方ないらしい。

それが良くないことを呼ぶのは長年の経験で分かっていたのに。

同性からの反感、中でも女の嫉妬は凄まじい。そして陰湿である。A子がいた頃は良かったのだ。クラスの中心的な人物との人脈は私をよく守ってくれた。

だが、それも2ヶ月前に終わってしまったこと。

より所の消失。それは心の部分も含めたもので。

その不在は、私が思っていた以上に私に多大なる影響を与えていた。

彼女が留学して数日後、私は告白された。

相手は話したこともないような名前も知らないクラスの男子。

当然、私は断った。

ただ、その時の私は……苛ついていたんだと思う。

ひどい事を言った気はするがよく覚えていない。顔もまともに見なかったから、誰だったかすらもわからない。

とにかく私はここでいじめを勃発させるきっかけを作ったのは間違いない。

ああ、私は……そんなに罪深いのだろうか。朝、学校に来てみると上履きが無くなっていた。

それが、暗黒の始まり、だった

無視。

嘲笑。

窃盗。

損壊。

冷水。

裁断。

教師に言うのは嫌だった。両親に知られるのはもっと嫌だった。

そして2ヶ月。

身体に痕の残るようなことはされていない。相手はそこまでの馬鹿じゃないのだ。

節度を、……いじめに節度があるのかどうか甚だ疑問だけど、“相手”は“節度”をわきまえていた。

そして今。教師に課題について呼び出しを食らって職員室に行っていたわずかな間に、

もう、終わっていた。

私は……無言で机の中に入っていたものを外に並べる。  
窓の外からは西日が強烈に差し込んでいた。それが机の上に並べられた品々を照らす。

その落書きをも鮮明に。

間

気がつくと、私はその全てをゴミ箱に投げ棄てていた。

「……………」

不思議と涙はでない。まあ、それすらこの2ヶ月で枯れ果てたというのが現実<sup>リアル</sup>ではあるが。

私は机の脇に掛かっていたバツクを掴んで、……バツクは無事だった、教室を出た。

小走りです。逃げるように。

……いったい何から？

そんなの、逃げられやしないのに。



ないのか？」と違って耳を疑った。

それは話を聞かされていたらしい友人も同じだったようで、「バカじゃね？そんな噂信じるヤツ今どき小学生でもないっしょ」とかなんとか感想を述べていた。

だが、語り手の女子はそれに対して反論する。

「それがマジっぽいんだって…。去年の夏辺りから遭遇情報があるらしんだけど、それが妙に生々しくて嘘っぽくないんだって！」

その女子が結構真剣にそんなことを言うから、その友人も沈黙した。

「じゃあ…実際どうい話があるの？」

やがて、好奇心が勝ったのかおもむろにそう尋ねる。

「それがね……………A組の　　が……………」

詳しく聞く前に、私はその場を後にしていた。

走る、ことはしない。ただゆっくりと、普段は通らない廊下を歩く。

……………

……………

…特段の興味があつたわけではなかった。ただフラリと、理科室の前に前まで来ていた。

「私もバカの種類か」

ポツリと呟く。

何故なら、理科室には鍵が掛かっていたからだ。ガチャガチャと動かしてみても開く様子はない。

完全な無駄足。時間の無駄だ。嗚呼、帰ろうと、思った時に気づいた。

「暗幕……？」

理科室には暗幕がしてあった。何故……？誰がこの時間にこの場所を使うの？

考えてみても、わからない。

“……”

「あ！」

その瞬間、

その一瞬の迷いのタイムラグの間に、聞こえたのだ。確かに。

“……カチャン……”

鍵の開く音。

自分が聞いた音を信じて、おもむろに扉に手をかける。

…

……

……開いた。

“ガラ……”

恐る恐る、というのを初めて実践した気がする。とにもかくにも、私は自分で理科室の扉を開いた。  
そこで出会った。

……何故か理科室で金貼りの豪華なソファに寝転がってジャンプを読んでいる変人（注・変な人。空を飛ばないものだけを指す）に

I t h a p p e n s S u d e n l y , b u t n o w I  
t h i n k t h a t i t i s f a t e .

理科室の、魔王：actress side（後書き）

スタート暗めな本作。だけど心配は無用です。次話には主人公が満を持して？登場いたします。

……というか初回に主人公がこんなに薄い作品というのはどうなのか、結構気がかりな今日この頃。

## 理科室の、魔王。

\*

「ふんふんふんふんふん~~~~」

人のいない授業棟。その二階の端に、その部屋はあった。

“理科室”

リノウムの床には絨毯が敷かれ、テレビ、冷蔵庫、クーラーは勿論のこと、ソファアーに、仮眠用ベッドまで完備。

その一方で部屋は1：3の広さ位に分けられていて小規模ながらも薬品やら何やらの実験器具も揃っていた。

その部屋の中には“黒い白衣”……正しくは“黒衣”を着た少年が1人。

学年証は二年を示す青。

ノンフレームのメガネは彼を知的に、

ボサボサで伸ばしっぱなしの黒髪は彼を暗い印象に、

前髪の間隙から覗く鋭い眼光は彼を攻撃的に、

それぞれ見せていた。

「やっぱワ。ピース面白いな……。最近の復調が著しい……」

ぶつぶつといいながら雑誌をめくる。

“僕”は腹這いになって足をぶんぶんさせながら、くつろぎを得ていた。

そう、この空間。

去年入学してから3ヶ月かけて完成させた僕の城。

元はただの空き教室（というか自習室）だったのを、僕が全て改修したものだ。

“理科室”

とは名ばかりで実際には授業に使われることはない。そもそも科目に「理科」なるもの自体存在しない。

それは中学生までだ。化学、物理、生物の実験室はそれぞれきちんとある。

じゃあ何故“理科室”かって？

……それはカモフラージュだ。

流石の僕でも“綾波専用室”とは名付けづらかったからねえ……。

ん、ああ、申し遅れた。

「綾波<sup>アヤナミ</sup>」とは僕の名字である。存外、僕はそれを結構気に入っている。

理由は？

……わかる人にはわかるんだよ。  
これで名前がレイとかシンジだったらお笑いだけど、そこまで世界は甘くない。

「流星<sup>ナガル</sup>」

それが僕の名前。怠惰と退屈を憎み、全ての“楽”を愛する者の名。

あ、流星っていつでも僕に双子<sup>ツヘミ</sup>の姉がいるとかそういう設定はないよ？

ただ僕は楽しい事が大好きなだけだ。

だからこの学園があまりにつまらないと分かった時、僕はすぐこの部屋を準備した。

自分の手で、楽しくするために。

全寮制で私立のこの学園はとかく規則が緩い。というか“緩くした”が正しいのだけど。

まあ、とにかく……僕はここで“ある事”をしている。  
というのは……

“ガチャ…ガチャ”

ん、ちょうどいいタイミングで……どうやらお客様らしい。  
鍵を開け、すぐさま元の体勢まで戻る。これは重要だ。

……だって待ち構えてたみたいに見られたら……何か恥ずかしいし。

そして現れたのは、

気の強そうな少女だった。

「……………」

向こうはこちらを凝視して固まっている。……人の顔を見ながら固まるなんて失礼なヤツめ。

「何かご用？」

ジャンプから少し頭を上げてその少女の顔をしっかりと見る。

その瞬間、言葉を失った。

ツイン……ツインテール……。

しかも金髪。つり目。

……おお、これは……、

「ツ……ツインデレの方ですか？」

「……………はあ？」

いや違った。そうじゃない。ここで言うべきはそんなことじゃないな

かった。

「そんなところに立ってないで、中入ったら？」

「え？いや、その……」

その少女は、扉の前で硬直したまま動こうとしない。

……明らかに挙動が不審だ。何だこの女？何をしにきたんだろ？

「願いがああるんじゃないの？」

「！……！」

そう無感情に告げてやれば、相手はすごく驚いた表情を見せた。

……面白いなこの子。実に面白いかも。

「中、入らないの？」

「……いえ」

とどめの一押し。たった一言言っただけであっさりと……。

ちよつと拍子抜けしたが、彼女が“お客”であることに変わりはない。

そんなこんなで、ほの暗い理科室へ僕は彼女を招き入れた。

それが“僕の”（私の）、“彼女”（彼）との、出会いだった。

\*

「とりあえず紅茶でも飲む？」

「……」

「とりあえず名前は？僕は綾波<sup>アヤナミ</sup> 流星<sup>ナガル</sup>。キミは？」

「……………」

「無視…かな？」

中に入ってもらったはいいが、彼女は初っぱなからATフィードが全開だった。

「ん…何か言つて貰えないと、僕もつまんないんだけど……………」

困る。だんまりを決めこまれても、察してやれることもない。困った。ああ困った。こういう沈黙は好きじゃない。好きじゃないことは楽しくない。

“楽”じゃない。

本当に……………」

「つまんない」

「……………」

ああ、もうスイッチ切れた。

「黙つても要件が伝わるのは赤ん坊までだ。キミ、それ以下？」

「つ…！、私はっ…！」

「ん、何？あ、紅茶もう蒸れたから飲んでいいよ」

カチャカチャとティーカップとジャムを並べれば、あら不思議。

学校に英国式の本格派午後ティーの完成。これがほんとに放課後ティータイムですね。

あ、あの四人の翼をくださいは結構好きです。  
だがアニメがね……。最近アンチの気持ちが若干理解できるよう  
になったかも。

……なーんてやってる間も彼女は唇の端を噛み締めている。

鬱血するのではないかというほど強く食いしばったその結び目は  
……不意にほどけた。

それと同時に始まる彼女の独白。

それは玉のように綺麗な声だった。

「……私は……！……いじめられているんだ……」

それは単純かつ悲壮な告白。「コンフェス」

わお……これは初めてのパターンかも……。

「へえ！キミが？……ふーん、最近のいじめは変わったね。普通は  
見た目かがアレの人とかが苛められない？」

こんな……可愛い感じのツンデレさんなのに。

「見た目……。いや不本意だけどその逆のことではいじめが……」

言われて少し考える。そしてようやく意図することに行き着いた。

「あゝ、ナルホド。そつちか。いやいやいじめとは……全くの予想外だったなあ。」

てつきり意中のあの人と両思いになりたい！！とかだとばかり」

実際、恋バナを聞かされることは多い。全くの初対面の人間にそんなことを話せる神経は僕も不思議だけど、僕からしても面白いからまあセーフだ。

ついでに、今のところのカップル成立率は驚異の100%である。

(8組中8組 all perfect!!)

もうほとんどキューピット自称しても良いんじゃないかって思っています。

「……私は……」

そつ言って彼女はまたうつ向き。軽く涙目のようだ。

……やっぱりこういう時にそつと肩を抱いてやる男がいてやった方がいいんだろうな、とか思いながら僕はブーツと見ていた。

少しの沈黙、

「で、」

を、切り裂くように不意に言葉を投げ掛ける。

「キミの願いは？」

That is magical word. Only be  
cause of this word, you shall be

e h a p p y . T h a t i s “ s a t a n i c ” W o r d

\*

弾かれたように僕を見る彼女。そして、震える口はとうとうと告げる。

「もう勝手なことされたくないの。そしてもう誰にも見下されたくない。もう私の中に入ってきて欲しくない！」

悲痛だ、と普通の人なら考えるだろう。

だが僕は、魔王（S a t a n）だった。

「プライド……、ね」

こういう時は言葉がすらすらでてる。ああヤダヤダ……Sっ気があるのかな……。

「キミが護りたいのはそれだろう？」「嘲笑わらわれたくない。」「

言うほどに彼女が下を向いて歯を食い縛っているのが分かった。だが止まらない。

「……そもそもキミに友達がないのはそのプライドが原因なんじゃない？」「お前らみたいなのと一緒にすんな」って、まんま見下す

雰囲気出してたら実際イラッとくるだろうし」

「ロイヤル一匹狼は嫌われるよね、と付け足していうと、遂に彼女は涙を溢していた。」

しかし目は、瞳はしっかりと僕を睨みつけたまま、だが。

「なら……どうすればいいのよ……。この性格が悪くて……いじめられるってなら、私が変われって？」

「は……そんなことまでしたら私は……。」「今のこの私」を殺せって言っているようなものじゃない！そんなの……。」

耐えられない。その続く言葉は言わせなかった。

……駄目だね。彼女は決定的に“思い違い”をしている。

「僕は出来るだけ優しい口調で、愛を囁くように言う。（しかしこれは故意にはない。その……秘書が悪いんです）」

「誰が、いじめられるのはキミが悪いと言った？」

「……え？」

その時の彼女の顔は面白かった。とつてもとつても。大胆かつ柔軟に。

「いじめはね、“いじめる方が100%悪い”よ」

時々、いじめは被害者側にも責任があるという人がいる。

「だがそれは本当に正しいか？そもそもいじめをするやつがいなければいじめは起きない。」

同じ事が別のことにも言える。盗られるほうが悪い？ぼんやりしてたから？

いや違う。盗ったほうが悪い。

犯されたほうが悪い？無用心に一人歩きしていたから？

いや違う。犯人が“絶対的に”悪いのだ。

そいつさえいなければ何も起きなかったのに。なのに今は被害者“も”責められる始末。

そんなの……楽しい？

「本質を見誤ると、世界は楽しくなくなるよ？」

嗚呼、今思い出しても恥ずかしい。何である時はあんなことが言えたのか、不思議でしようがない。

だが僕は、あの時“魔王”だった。

「だから……キミの願いを叶えてあげよう」

その時、開いていた窓から狙いすましていたかのように風が舞った。

風と共に舞い上がる前髪。メガネ以外の遮蔽物の無い状態で初めて彼女の顔を見た。

おお、やっぱり可愛い。内心に小さな驚きを隠しながらもつ一度彼女を見ると、彼女もまた驚いた顔をしていた。

それも啞然、というのが正しいような顔。

……どうしたんだろ？

「何？どうしたの？」

聞いてみた。

「……えっ、いや……あの、なんでもない……その……」  
「????？」

まあ、いいや。

その時僕は、彼女もまた僕の素顔を見ていたというのに気づかなかった。

\*

「じゃ、僕は準備をするから。キミはもう帰ったほうがいいよ」

もう結構な時間だ。まあ、寮の門限もあって無いに等しいくらいに“した”が…。

「遅くならないうちに帰ったほうがいい」

まだぼんやりしているような様子の彼女の手を引いて部屋の出口までつれていく。

「あの……」「ん？」

「その……手……」「ああ、ゴメン。勝手に触っちゃって」

「いや、そっぴうわけじゃ……」

何故か彼女の顔が真っ赤だ。まあ、そう距離もないからすぐ扉の前についたけど。

「じゃ、後は明日のお楽しみ、かな」

その時、僕はもうこれからする事の考えで一杯だった。

「それじゃ、“また明日”。水無月<sup>ミナツキ</sup>茜<sup>アカネ</sup>さん」

「え……？何で私の名前……」

疑問には答えず、扉をあつという間に閉める。理由？その方がカッコいいと思わない？

ガラガラ、ぴしゃん。

「さて、」

扉を閉め、周りに誰もいなくなったことを確認して息を深く吐く。やるとなったら行動は早い。しかし、いじめか……この学園に限ってそんなことはないと思っていたが……。

まだまだ僕も甘いな。“僕の”学校だもの。  
それはそれは皆が“楽しい”学校にしたいよね。  
その日、僕はそれはそれは珍しくも忙しく動き回った。

n s  
g h a p p y , w i n , a n d j o y , a n d  
l i e s , j o y i n n y f u n n y  
" s t e l l i t h i n g

理科室の、魔王。(後書き)

はつきり言って作者はそれほどツンデレが好きなのはいいです。どっちかというとほんわり系、かがみよりつかさ、杏より棕みたいな？

……それはどうでもいいとして、一人称視点はこれでいいんでしょうか？結構不安なまま書いています。レビュー・アドバイス等ありましたら遠慮なくお願いします。

どうでもいい話の続き。

かがみよりつかさと言いましたが、その上はゆたかだと思う今日この頃。あ、あと棕よりも風子です(でもあんまりこっちは友人から理解されない……何故だろう?)

## 教室の、魔王。

\*

と、いうことで。

「今日からこのクラスでお世話になる綾波流星アヤナミナガルです。体が弱くてこの2ヶ月は休んでいましたが、皆さんと一緒に勉強が出来るようになって嬉しいです」

ニツコリ。僕の平生を知っている者なら泡を吹いてひっくり返りそうな営業スマイル。

……これで見えた目の印象は少し緩和されたかなーと思う。ボサボサの黒髪もこの年代には少ないが見珍しいものではない。

その上で、敢えてフレンドリー路線で行けば、最初から迫害を受ける心配はない……というのが昨日考えたシナリオである。その予想は大方当たったようで、好奇の視線はあっても敵意は感じなかった。

「綾波の席は、そうだな…… A子の席が開いていたな？取りあえずはそこに座ってくれ」

指された席を見ると……黒板から向かって右、窓際が一番後ろ。

八ヒの席だなーと思って席に向かうと、眼前、ヨンの席には、

「あれ、奇遇だね水無月さん」

「な……なん……!？」

これはビックリ。水無月さんがいるではないか。それは彼女もそうだったらしく、大きな目を目一杯に開いて、驚きをあらわにされてらっしゃる。

うん、面白い。

「あ、席がこんなに近くなるとは思わなかったよ。水無月さんもビックリ?」

言いながら席につく。うん、日が当たって気持ちいいね、「コ」。

「うん、そうだね午後とか眠くなっちゃうけど……………じゃなくて、なんでアンタがここにいるのよ!」

おお…………この啖呵は何か…………、

「やっぱりツンデレか…………」

「はい?」

「いや何でもないよ。こっちのお話だから」

「だっ、だから、何でアンタが…………!」

やっぱり気が強いってのは当たってた。しかし今は間が悪い。

「ストップ。今HR中だから…………後で、ね?」

コソツと告げるとハツとしたように水無月さんは振りかえる。そこには呆気にとられた目、目、視線。

それと何故か申し訳なさそうな教師が1人。

一気に水無月さんは顔を赤くして座った。

……やっぱり面白いね。

\*

HRはつつがなく終わり、こういう場面って質問責めにされるの  
かなーって思ってたなら、その前に水無月さんに手をとられて廊下に  
引きずり出された。

わぁ、力も強い。

「説明……してくれるんだよね？」

「え？ああ、席が前後になったのは全くの偶然で」

「そっちじゃない！まずなんでアンタがこのクラスに転入出来たの  
かが知りたいの！」

嗚呼、そっちか。それなら簡単だ。

……にしても、水無月さんは昨日とはうって変わっての強気なの  
だけ。

どっちが素なんだろうね？

「僕もこの学園の生徒だし」

「それは…昨日もわかってたけど…。だからって急に別のクラスに  
変わるなんてこと……」

「不可能を可能にする男だぜ、俺は！」

「？」

「いえ、なんでもないです……」

くっ、無反応が悲しい。一般人との文化の違いは人と巨人（ゼン  
トーデイ）くらい溝がある……。

嗚呼、デカルチャー……。

「駄目だな……やっぱり異文化なんだな僕も……」

ちよつと目から塩水が……。

「ちよ、どうして急に泣くの？やだ、これじゃ私が泣かしたみたい  
じゃ……」

“うわ、あの女。また男を捨てたんじゃね？”

“ひさーん。何あれ超みじめじゃね。廊下で泣かすって何を言っ  
たんだよ”

おお、また何か水無月さんの評価が落ちた（主に女子）ようだ。  
そんな声を聞きながら水無月さんの方を見ると案の定、肩を震わせ  
ている。

あれ？泣きそう？

「あの水無月さーん？そのー……」

「アンタ……、願いを叶えてくれるのよね？」

「え？ああ、もちろん」

「じゃあ、初っぱなから好感度をさらに落としてくれたのは何なの

「？」

それはそれは、ゴゴゴゴ、っていう効果音が似合う笑顔だった。あれは子どもが見たらトラウマになるかもしれない……。

「あはははー、ごめんなサーイ」

「適当っ！なにその気のコもってない感じ！」

謝ったのにさらに火に油を注いでしまったようだ。むう、困った。

“キーンコーンカーンコーン……”

「あ、もう先生来るから中入ろっか」

ナイスなタイミングで鐘がなる。……うん、本当にナイス。

「あ、ちょっと……もっっ！」

逃げ足は脱兎ハヤテのごとく。まあ、僕にはあそこまでのハイスペックな身体能力はないけどね。どっちかという頭脳派に分類されるといいな、僕。

なんて思いながら、かつ絶妙なチャイムに感謝しながら僕は席につく。

まあ、当然のこと目の前には水無月さんがいるけど、さすがに授業中に何か言ってくることもなかった。

そして数刻。

\*

「平和なのはいいとして、それが過ぎると退屈に変わるな……」

今は休み時間である。肝心の水無月さんは授業が終わった早々に教室から出ていこうとしてたから、当然後についていこうとしたら殴られた。

曰く、

“察しなさいよ”

の一言。

彼女はそのままお花畑<sup>トイレ</sup>の方に走っていった。……んなこと言われなくちゃわかるわけがない。

一息つきながら窓の外を見る。

桜ももうとつくに散った並木には緑が生い茂っていた。

「教室から見ると、こう見えるのか……」

理科室から見える景色とは違う角度からの眺め。

普段とは違う視界、視点。なんだかこそばゆいが、新鮮な感覚は決して心地悪い物ではない。

「ふむ……」

あの並木、桜以外の木も植えた方がいいかな……。

ご神木とかね。

いいなー、掘ったらケガレを退治する神様が宿ったりするようなやつとか。

「ねえ、ちょっと」

なんとなくノスタルジック??な気分には浸っていると、不意に誰かに話しかけられた。

……どなた？

「んあーはい？何？」

首だけ動かして見ると、いつの間にやらケバめのJKに机を囲まれている。

「ちょっと聞いていい？君さあ、水無月の何？まさかカレシとか？」

「だったらヤバイよ。アイツ男なら誰にでも色目使ってたからさ。」

アイツはやめといた方がいいから」

「でもさ、この……なんつーかガリ勉メガネっぽいコイツ、アイツに似合いじゃね？」

「あはは、マジそうかも！オタクとヤリマン、お似合いだわ！」

ギヤハハハハハハ、と大口を開けて笑う仕草がこんなにも似合うヤツらは他にいないと思う。

なんとというか……中ボスの前に出てくる微妙な敵っぽい……。それが印象の全てだった。

……しかしまあ、分かりやすいじめの元凶、あるいは重要なフアクターさんだこと。

もうちょっとひねってくれたらもっと面白いのに。

そのまま何も言わずにポケーと、ケバい人ABCを見てると、相手が少し苛立ってきた様子が分かった。

「は？何とか言わねえの？」

「えー、シカトですか？」

「せっかくアタシらが話しかけてやってるのに」

雲行きが怪しくなってきた。

“計画”だところで僕まで対象にされるのは“まだ早い”。

「いや、ちゃんと聞いているよ」

ニコリと、スマイルは忘れずに。0円だしね。

「じゃ、感想はー？」

「つつかさー、まじつるむんだったら相手選んだ方がいいよ」

「あー、為になるお話だね。メモメモ！」

そしてまたギャハハハと笑う。

……ふむ、僕女性のバカ笑いは嫌いかも。鳥肌が立つね。ぞらぞらする。

「ああ、忠告ありがとう。……うん、友達を選ぶようにするよ」

内心なおざりに、外面しつかりとそう答えると、ケバ三人衆は満足したのかさっさと去っていった。

流れで言っと、

エンカウント 戦闘画面 スキル発動 逃亡鶏（チキンチン）

アヤナミは逃げ出した！……的なの？  
はあ、微妙に疲れた。

また一息。すると入れ替わりのいいタイミングで水無月さんが戻ってきた。

「ん……」

席につくなり顔をしかめる水無月さん。

「どうかしたの？」

聞いてみた。

「いや、香水臭いから……あつ、この香水！あいつら……。アンタ、何か言われなかった？」

水無月さんはあの三人の香水の匂いまで覚えているらしい。

……まあ、確かに強烈な“臭い”だしね。

「言われたよ。『友達は選んだ方がいい』って」

「……ふーん……」

言われたことを伝えると、水無月さんは少し反応しただけで、後は急に静かになった。

んー……

ツンデレ乙女の傷心か……

「誰がツンデレ乙女よ!!」

おお、今度は地の文にまでツツコンで来た……。心を読むとは……やりおるな。

「ずっと全部声にでてるわよ……。てか、それわざとでしょ？」

「あ、分かった？」

「……死ね！」

ぶいっと、前を向いてしまう水無月さん。

……やっぱりこの反応は、かがみさんとか文乃さんに通じるものがあるな……。

「あー、ごめんごめん。

ちゃんと作戦は考えてあるから機嫌直して、ね？」

両手についてそう言うと、水無月さんはジト目……。若干の疑いを残した顔をしながらもまた後ろを見てくれた。

ああ、やっぱり彼女は良い。そんな反応が初々しいから。

「とりあえずまずする事は、友達をつくることだね。これが一番重要なことだよ」

僕は昨日考えたことをざっと彼女に説明した。

- ・孤立した者は攻撃しやすい
- ・クラスの全員がいじめに結託することは稀。
- ・実行している人間は少数で大半は無関心。
- ・いじめに関して反感をもってはいるが、特に無関心な勢力を取り込むこと。

などなど。

「まあ、勢力つてたってそんなに沢山の人に媚びを売る必要はないけど」

こういうとき味方は一人でも、いないよりは精神的に楽だし。

「てことで、クラスで他に孤立しているひといない？」

そう聞くと、

「孤立ねえ……。」

私、あんまり人と付き合いがないから……。」

ちょっと切ないことを言う水無月さん。しかし今は細かいことは気にしない、気にしない。

「クラス内相関図ぐらい2ヶ月もあれば作れそうなものだけど」

「悪かったわね……。だ、だったらアンタはどうなの？もう人間関係把握したっていの？」

「うん」

即答してあげた。

「はい？」

「だいたい六つぐらいのグループに分かれてるよね、このクラス。最大勢力は女子、あのケバ三人衆もその枠内には入ってるけど主流イシの影響力はない。

男子は個々の付き合いで少数勢力が散らばってるけど、基本は体育会系の部活の人と文化部系に別れてて、具体的な名前ですと…

…」

「ごめん、私が悪かった」

何故かこめかみを押さえた水無月さんに謝られた。

んー、なんか気に触った？まあ、別に気にしないけど。

「僕が見たところ、あの前の席の子……あんまり友達いなさそうだけど」

指し示す先には黙々と本を読んでいるメガネ少女。

さつきから見ても、休み時間だというのに一步も動いていないし、誰かと喋っている様子もなかった。

「ああ、九十九ツクモさん？

あの子はちょっと暗いというかなんとというか……。

喋りかけるとすぐ顔真っ赤にしてうつ向いちゃって、うーん……よくわかんない子だよ」

水無月さんは曖昧な笑み、よりは苦笑いに近い顔をした。どうや

ら苦手な人らしい。

でも、僕には確信があった。

「あの子……絶対に髪とメガネの下に何か隠してるから」

「は……何を？」

彼女にはわからないのだろうか？僕には一目見た時にピキーンと直感が走ったのに（アムロっぽい感じで）。

「あの子……いちごパンツか対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスに違いない！！！」

それかドジツ子だと凄く面白い！！

「またそっちかい！真面目に聞いてた私がアホだった……」

またまたこめかみを押さえる水無月さん。しかし今度はため息まで追加されている。んー、今フオローすべきは……、

「ストレスは体にわるいよ？」

「アンタねえ……はあ」

？

そう言つと、何故かさらに脱力する水無月さん。ふむ、よくわかんないから放置。

あつさり意識を外すともう興味はその九十九ツクモさんに移つた。

やっぱり図書室なのかな……

昼休みには行つてみようかと僕は決心した。

W n .  
H e p u t s o n a s h o w l i k e a c l o

## 教室の魔王。(後書き)

はつきり言って作者はツンデレが好きなのではない(二回目)。  
前回のあとがきにはほんわり系が好き、と書きましたが、……無口  
キャラも好きです。(特に長門さん、長門さん長門さん長門さん…  
etc)

普段verだと眼鏡はいらないけど、消失verだと眼鏡があそこ  
まで必須になるのが不思議。

長門有希ちゃんの消失 漫画 万歳、とか思う今日この頃。

## 教室の、魔王。

\*

と、いうことで。

「今日からこのクラスでお世話になる綾波流星<sup>アヤナミナガル</sup>です。体が弱くてこの2ヶ月は休んでいましたが、皆さんと一緒に勉強が出来るようになって嬉しいです」

ニツコリ。僕の平生を知っている者なら泡を吹いてひっくり返りそうな営業スマイル。

……これで見えた目の印象は少し緩和されたかなーと思う。ボサボサの黒髪もこの年代には少ないが見珍しいものではない。

その上で、敢えてフレンドリー路線で行けば、最初から迫害を受ける心配はない……というのが昨日考えたシナリオである。その予想は大方当たったようで、好奇の視線はあっても敵意は感じなかった。

「綾波の席は、そうだな…… A子の席が開いていたな？取りあえずはそこに座ってくれ」

指された席を見ると…… 黒板から向かって右、窓際が一番後ろ。

八ヒの席だなーと思って席に向かうと、眼前、 ヨンの席には、

「あれ、奇遇だね水無月さん」

「な……なん……!？」

これはビックリ。水無月さんがいるではないか。それは彼女もそうだったらしく、大きな目を目一杯に開いて、驚きをあらわにされてらっしゃる。

うん、面白い。

「あ、席がこんなに近くなるとは思わなかったよ。水無月さんもビックリ?」

言いながら席につく。うん、日が当たって気持ちいいね、「コ」。

「うん、そうだね午後とか眠くなっちゃうけど……………じゃなくて、なんでアンタがここにいるのよ!」

おお…………この啖呵は何か…………、

「やっぱりツンデレか…………」

「はい?」

「いや何でもないよ。こっちのお話だから」

「だっ、だから、何でアンタが…………!」

やっぱり気が強いってのは当たってた。しかし今は間が悪い。

「ストップ。今HR中だから…………後で、ね?」

コソツと告げるとハツとしたように水無月さんは振りかえる。そこには呆気にとられた目、目、視線。

それと何故か申し訳なさそうな教師が1人。

一気に水無月さんは顔を赤くして座った。

……やっぱり面白いね。

\*

HRはつつがなく終わり、こういう場面って質問責めにされるの  
かなーって思ってたたら、その前に水無月さんに手をとられて廊下に  
引きずり出された。

わぁ、力も強い。

「説明……してくれるんだよね？」

「え？ああ、席が前後になったのは全くの偶然で」

「そっちじゃない！まずなんでアンタがこのクラスに転入出来たの  
かが知りたいの！」

嗚呼、そっちか。それなら簡単だ。

……にしても、水無月さんは昨日とはうって変わっての強気なの  
だけ。

どっちが素なんだろうね？

「僕もこの学園の生徒だし」

「それは…昨日もわかってたけど…。だからって急に別のクラスに  
変わるなんてこと……」

「不可能を可能にする男だぜ、俺は！」

「？」

「いえ、なんでもないです……」

くっ、無反応が悲しい。一般人との文化の違いは人と巨人（ゼン  
トーデイ）くらい溝がある……。

嗚呼、デカルチャー……。

「駄目だな……やっぱり異文化なんだな僕も……」

ちよつと目から塩水が……。

「ちよ、どうして急に泣くの？やだ、これじゃ私が泣かしたみたい  
じゃ……」

“うわ、あの女。また男を捨てたんじゃね？”

“ひさーん。何あれ超みじめじゃね。廊下で泣かすって何を言っ  
たんだよ”

おお、また何か水無月さんの評価が落ちた（主に女子）ようだ。  
そんな声を聞きながら水無月さんの方を見ると案の定、肩を震わせ  
ている。

あれ？泣きそう？

「あの水無月さーん？そのー……」

「アンタ……、願いを叶えてくれるのよね？」

「え？ああ、もちろん」

「じゃあ、初っぱなから好感度をさらに落としてくれたのは何なの

「？」

それはそれは、ゴゴゴゴ、っていう効果音が似合う笑顔だった。あれは子どもが見たらトラウマになるかもしれない……。

「あはははー、ごめんなサーイ」

「適当っ！なにその気のコもってない感じ！」

謝ったのにさらに火に油を注いでしまったようだ。むう、困った。

“キーンコーンカーンコーン……”

「あ、もう先生来るから中入ろっか」

ナイスなタイミングで鐘がなる。……うん、本当にナイス。

「あ、ちょっと……もっつ！」

逃げ足は脱兎ハヤテのごとく。まあ、僕にはあそこまでのハイスペックな身体能力はないけどね。どっちかというと頭脳派に分類されるといいな、僕。

なんて思いながら、かつ絶妙なチャイムに感謝しながら僕は席につく。

まあ、当然のこと目の前には水無月さんがいるけど、さすがに授業中に何か言ってくることもなかった。

そして数刻。

\*

「平和なのはいいとして、それが過ぎると退屈に変わるな……」

今は休み時間である。肝心の水無月さんは授業が終わった早々に教室から出ていこうとしてたから、当然後についていこうとしたら殴られた。

曰く、

“察しなさいよ”

の一言。

彼女はそのままお花畑<sup>トイレ</sup>の方に走っていった。……んなこと言われなくちゃわかるわけがない。

一息つきながら窓の外を見る。

桜ももうとつくに散った並木には緑が生い茂っていた。

「教室から見ると、こう見えるのか……」

理科室から見える景色とは違う角度からの眺め。

普段とは違う視界、視点。なんだかこそばゆいが、新鮮な感覚は決して心地悪い物ではない。

「ふむ……」

あの並木、桜以外の木も植えた方がいいかな……。

ご神木とかね。

いいなー、掘ったらケガレを退治する神様が宿ったりするようなやつとか。

「ねえ、ちょっと」

なんとなくノスタルジック??な気分には浸っていると、不意に誰かに話しかけられた。

……どなた？

「んあーはい？何？」

首だけ動かして見ると、いつの間にやらケバめのJKに机を囲まれている。

「ちょっと聞いていい？君さあ、水無月の何？まさかカレシとか？」

「だったらヤバイよ。アイツ男なら誰にでも色目使ってたからさ。」

アイツはやめといた方がいいから」

「でもさ、この……なんつーかがり勉メガネっぽいコイツ、アイツに似合いじゃね？」

「あはは、マジそうかも！オタクとヤリマン、お似合いだわ！」

ギヤハハハハハハ、と大口を開けて笑う仕草がこんなにも似合うヤツらは他にいないと思う。

なんとというか…中ボスの前に出てくる微妙な敵っぽい……。それが印象の全てだった。

……しかしまあ、分かりやすいじめの元凶、あるいは重要なフアクターさんだこと。

もうちょっとひねってくれたらもっと面白いのに。

そのまま何も言わずにポケーと、ケバい人ABCを見てると、相手が少し苛立ってきた様子が分かった。

「は？何とか言わねえの？」

「えー、シカトですか？」

「せっかくアタシらが話しかけてやってるのに」

雲行きが怪しくなってきた。

“計画”だとここで僕まで対象にされるのは“まだ早い”。

「いや、ちゃんと聞いているよ」

ニコリと、スマイルは忘れずに。0円だしね。

「じゃ、感想はー？」

「つつかさー、まじつるむんだったら相手選んだ方がいいよ」

「あー、為になるお話だね。メモメモ！」

そしてまたギャハハハと笑う。

……ふむ、僕女性のバカ笑いは嫌いかも。鳥肌が立つね。そろそろする。

「ああ、忠告ありがとう。……うん、友達を選ぶようにするよ」

内心なおざりに、外面しつかりとそう答えると、ケバ三人衆は満足したのかさっさと去っていった。

流れで言っと、

エンカウント 戦闘画面 スキル発動 逃亡鶏（チキンチン）

アヤナミは逃げ出した！……的な？  
はあ、微妙に疲れた。

また一息。すると入れ替わりのいいタイミングで水無月さんが戻ってきた。

「ん……」

席につくなり顔をしかめる水無月さん。

「どうかしたの？」

聞いてみた。

「いや、香水臭いから……あつ、この香水！あいつら……。アンタ、何か言われなかった？」

水無月さんはあの三人の香水の匂いまで覚えているらしい。

……まあ、確かに強烈な“臭い”だしね。

「言われたよ。『友達は選んだ方がいい』って」

「……ふーん……」

言われたことを伝えると、水無月さんは少し反応しただけで、後は急に静かになった。

んー……

ツンデレ乙女の傷心か……

「誰がツンデレ乙女よ!!」

おお、今度は地の文にまでツツコンで来た……。心を読むとは……やりおるな。

「ずっと全部声にでてるわよ……。てか、それわざとでしょ?」

「あ、分かった?」

「……死ね!」

ぶいっと、前を向いてしまう水無月さん。

……やっぱりこの反応は、かがみさんとか文乃さんに通じるものがあるな……。

「あー、ごめんごめん。

ちゃんと作戦は考えてあるから機嫌直して、ね?」

両手についてそう言うと、水無月さんはジト目……。若干の疑いを残した顔をしながらもまた後ろを見てくれた。

ああ、やっぱり彼女は良い。そんな反応が初々しいから。

「とりあえずまずする事は、友達をつくることだね。これが一番重要なことだよ」

僕は昨日考えたことをざっと彼女に説明した。

- ・孤立した者は攻撃しやすい
- ・クラスの全員がいじめに結託することは稀。
- ・実行している人間は少数で大半は無関心。
- ・いじめに関して反感をもってはいるが、特に無関心な勢力を取り込むこと。

などなど。

「まあ、勢力つてたってそんなに沢山の人に媚びを売る必要はないけど」

こういうとき味方は一人でも、いないよりは精神的に楽だし。

「てことで、クラスで他に孤立しているひといない？」

そう聞くと、

「孤立ねえ……。」

私、あんまり人と付き合いがないから……。」

ちょっと切ないことを言う水無月さん。しかし今は細かいことは気にしない、気にしない。

「クラス内相関図ぐらい2ヶ月もあれば作れそうなものだけど」

「悪かったわね……。だ、だったらアンタはどうなの？もう人間関係把握したっていの？」

「うん」

即答してあげた。

「はい？」

「だいたい六つぐらいのグループに分かれてるよね、このクラス。最大勢力は女子、あのケバ三人衆もその枠内には入ってるけど主流イシの影響力はない。

男子は個々の付き合いで少数勢力が散らばってるけど、基本は体育会系の部活の人と文化部系に別れてて、具体的な名前ですと…

…」

「ごめん、私が悪かった」

何故かこめかみを押さえた水無月さんに謝られた。

んー、なんか気に触った？まあ、別に気にしないけど。

「僕が見たところ、あの前の席の子……あんまり友達いなさそうだけど」

指し示す先には黙々と本を読んでいるメガネ少女。

さつきから見ても、休み時間だというのに一步も動いていないし、誰かと喋っている様子もなかった。

「ああ、九十九ツクモさん？

あの子はちょっと暗いというかなんとというか……。

喋りかけるとすぐ顔真っ赤にしてうつ向いちゃって、うーん……よくわかんない子だよ」

水無月さんは曖昧な笑み、よりは苦笑いに近い顔をした。どうや

ら苦手な人らしい。

でも、僕には確信があった。

「あの子……絶対に髪とメガネの下に何か隠してるから」

「は……何を？」

彼女にはわからないのだろうか？僕には一目見た時にピキーンと直感が走ったのに（アムロっぽい感じで）。

「あの子……いちごパンツか対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスに違いない！！！」

それかドジツ子だと凄く面白い！！

「またそっちかい！真面目に聞いてた私がアホだった……」

またまたこめかみを押さえる水無月さん。しかし今度はため息まで追加されている。んー、今フォーローすべきは……、

「ストレスは体にわるいよ？」

「アンタねえ……はあ」

？

そう言つと、何故かさらに脱力する水無月さん。ふむ、よくわか  
んないから放置。

あっさり意識を外すともう興味はその九十九ツクモさんに移つた。

やっぱり図書室なのかな……。

昼休みには行つてみようかと僕は決心した。

w n .  
H e p u t s o n a s h o w l i k e a c l o

## 教室の魔王。(後書き)

はつきり言って作者はツンデレが好きなのではない(二回目)。  
前回のあとがきにはほんわり系が好き、と書きましたが、……無口  
キャラも好きです。(特に長門さん、長門さん長門さん長門さん…  
etc)

普段verだと眼鏡はいらないけど、消失verだと眼鏡があそこ  
まで必須になるのが不思議。

長門有希ちゃんの消失 漫画 万歳、とか思う今日この頃。

理科室の、魔王。(再)

\*

というこゝで

「放課後ちょっとミーティングしたいから理科室来てくれる?」

帰りのHR終わりに、水無月さんに声をかける。

部活には入ってないらしいからOKは快く頂いた(というか強制)

なのでちゃっちゃと舞台は理科室へ。

しかし……、

「いじめって大変だね。

荷物全部持って帰ってるんだ?」

学生なら黙って置き勉!というのが普通なのに教科書のたぐいを、寮だから近いとはいえ、持って帰るのは相当な労力だ。

と思うのだが、

「どうせ部屋で勉強するからいいの」

なん、だと……!?

アナタは神か？キラなのか？

勤勉なツンデレってのも……ああでも、かがみが居たか……  
あー、二番煎じ？

「誰が二番煎じなのよ！」

「痛っ！な、殴ったね？親父にもぶたれたことないのに！」

「うるさい！」

「二度もぶった！」

……嗚呼、楽しい。

\*

「と、まあ冗談はこれくらいにして……どう？」

「どう、って？」

「だから“願い”の成し度はどれくらい？ってこと」

今日の進歩は僕は素晴らしいと思う。ロンリーウルフにたった一日で親友……、とは最初からはいかなくても少なくとも好意的な友人はゲットしたし。

さて、水無月さんの評価は……

「そ、それは……その、九十九ちゃんと仲良くなれたのは……アンタのお陰だしその……」

ボソッ ……とう

「え？」

何だか後半になるにつれ全然聞こえないのだけれど。  
そこが一番重要なんじゃない？

「だ、から！」

「だから？」

「どうも……あ、ありがとつ。」

って言いたかったのっ！それくらい察しなさい！！

「ちょ、なんでそれで僕にキレてくるの？」

あっははは、顔真っ赤。本当にかぁーいいね、水無月さん。  
こつこつ“報酬”があるから“魔王”は止められない。

まあ……止める気もないけど。

「んじゃ明日からの作戦、言っちゃおうか」

「……………はっ。」

うん、ここ最近はこの反応が見たくて頑張ってるって感じかも。

ボカーン、ていう効果音が似合いすぎる顔だ。

口。くち

口が、女の子にあるまじき感じですが……まあ、それでも可愛いのはツンデレ補正？

……ピンポン玉入るかな……？

「てことで、明日から僕に話しかけないでね」

「はあ？ちよっと、それって一体……!？」

「“いじめ”さんにお出まし願って、ばっちり証拠として、サッさとご退場願う為。」

って言えば、わかってくれる？」

「っ……!」

うん、物わがりのいい子は好きだよ。

「1週間。いや、上手くいけば3日でケリをつけられる」

言いながら、自然とにやける顔が押さえられない。

いけないいけない、これは“勸善懲悪”なんだから。

僕（actor）が、  
チープな悪役顔で笑っちゃ、ね？

まあ……魔王だったらいいか。

「じゃ、そういうことで明日からよろしく」  
「……………」

水無月さんはそう告げてからずっと無言である。

……………ふむふむ

「何か僕に聞きたいことでもあるの？」  
「っ！」

その言葉を投げ掛けると、彼女は弾かれたようにこちらの顔を見つめる。

……………やがて、ポツリと咳きが漏れた。

「……………なんで……………」

おっと、危うく聞き逃すところだった。ほーう、“なんで”と来たか。

「それってさあ、なんで自分の為にそこまでしてくれるのか、っていう意味の“なんで”？」

「……凄いな。私の思ってること何でも知ってるの？」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ」

……僕は羽川さんより撫子派かな、あっ、でも堀江ボイスは捨てがたい……!!」

「誤魔化さないで」

僕は。

ピタリ。

動きが止まる。

その真剣な声。

捉えて離さない瞳。

息を飲みこむ喉の動き。

んー…

シリアスパートはまだ早いよ？

しかし、

「……責任、かな」

ちょっとは話してあげようか。

「責任？」

何の？

と、当然彼女は聞いてくる。僕はそれに答えずただ曖昧に微笑む。

「いいから、今日はもう帰っていいよ。数学の宿題もあるでしょ？」  
「あっ！」

と驚く水無月さん。あ、こりゃ忘れてたな。

「ちゃんとやってね。僕も写したいし」  
「自分でやれ！」

おお、いいつつこみ。

「あ、こういう会話も教室では禁止だから」  
「え…あ、うん」

釘は……刺したからね。

でも、その“釘”を“痛がっている”顔をしてくれるのは嬉しい。  
たった一日でこれだけ仲良く、というか懐かれる、というかてな  
づける、

……てなづけるって言うとか何かエロスの香りがするからやめてお  
う。

仲良くなるのも不思議だ。

「相性、良いのかもね」

「は……？な、なな、ちよっ、何言っ……！」

また急に顔を赤くする。

「……？他意はないけど。これからもいい友達でいられそうだなってことだよ？」

「……………」

「ん？“他意”のほうを取っちゃった？」

「に……………」

「に？」

「二回死ねバカ！」

バーカバーカと連呼しながら水無月さんは本当にそのまま行ってしまった。

\*

「からかい過ぎたかな……？」

ちよっぴり胸のどこかでちくりとするものがあつたが取り立てて気にはしない。さて、こんなことをしている場合じゃないんだよね。

カメラ、盗聴器、あと編集は……そうだな、あの部屋でやろう。



## 教室の魔王。(二日目)

\*

さて、それでは攻撃のターゲットを僕に向けさせましょうか。

用意するのは市販の炭酸飲料。  
まず、振ります。

そして十分にシュワシュワと不穏な音がするようになったら準備完了。

狙いをすまして……………そこっ！

ブシャアアアアっっ！！

「うわっ！？何すんだバカ！」

「何コイツあり得ないですけど！」

「テメ…………ざけんなよ」

コカ・コー　まみれになったケバ三人衆。あっはっは、いい気味。

「謝れよてめえ！」

「マジないんですけど」

「絶対つわざとだろコレ」

嗚呼、怒ってる怒ってる！煽りは完璧だ。

さてそこで応対するキャラクター設定は…………真面目眼鏡ドジ。

「う、ごめんなさい…………」

つまるところ鈍くさい草食系つてところだ。あれだ、見ていてイライラするやつ。

さて、その性格キャラクターに対する彼女らの反応は……、

「はっ、あの女のお仲間なだけあってやつぱりトロいな！」

「そーいやアイツ今日は九十九のやつと話してね？」

「あの宇宙人ツクモ？アイツ喋れたんだ」

ギャハハハハとコーラまみれで笑う3人。

う……この絵面はないわ。気持ち悪過ぎる。

しかし、駄目だね。話の流れがむこうに向かってしまっている。それでは計画は失敗だ。

「水無月さんと……九十九さんの悪口言わないでください」

トドメとばかりにもう一芝居。うつむき調子で言えば、

“いじめられっ子を庇う正義気取りの目障りなヒョロ男”。

あっという間に完成である。

「あ？」「は？」「はあ？」

こちらを睨み付ける三対の瞳は、獲物を見つけたハイエナに似ている。

\*

一度回った歯車は他の部品を回しながら動き続ける。

水無月さんはちゃんとこちらを無視していた。

というより僕の方から避けているのだけど。

さあ、どうだろう？

明後日から始まるか。

明日から始まるか。

それとも今日？

それによってエンディングの日は変わる。

実力で排除したとして……あの3人の親が微妙だな。

“常識”があればいいのだが。

ああ、祭りが始まる前に後片付けの事を考えたってつまらないか。  
それは秘書に任せればいい。

つつがなく午前の授業は終わり、昼休み。

……昨日の今日で、一応興味の対象になってもおかしくない復学生なのだけれど。

誰も近づてこないのは、昨日水無月さんと一緒に居たことと、朝のあの一件が原因だろう。

そりゃそうだ。いじめは外から傍観しているのが一番楽しいのだから。

沈黙。

黙々と箸を進める。

今日はお弁当を持って来ていた。

一応、見た目は美味しそうだけど味は微妙だ。

濃すぎる。後で文句を言うのは確定だな。

さて、今日わざわざお弁当を持ってきたのには理由がある。それは……

ガシャンっ！

「あっ、ごめん落としちゃった」

「あー、何やってんのよ」

「ごめんねー、この子ドジっ子だから」

こんなケバいドジっ子はいらん。

じゃなくて、こういう“エサ”になってもらう為の今日のお弁当である。

見事にぐっちやぐちやになって床に広がった。

作ってもらった人と地球に罪悪感を感じるが…まあ、しかたない。

……それにしてもこの白々しさ。さすがに“慣れてる”だけある。まったく尊敬できない“慣れ”ではあるが。

「いや、不注意なら仕方ないよ」

そう言っただとされた物をいそいそと自分で片付けてみる。  
そうするとほら、嬉しそうだね、彼女達。

「ホントゴメン！」

「でもさこれで朝のあれとでチャラじゃね？」

「だよ〜。マジあれはないっしょ」

「うん。本当にごめん」

そう言っただ愛想笑いをする。

造られた無知、を演じる役者に今はなりきっていた。  
そして、

この茶番を最高に楽しんでいる自分を見つける。

……いつの間にか口角が上がっていた。

いけないいけない。これはあくまで水無月さんの為、そしてこの学校の者としての責務なのだから。

“教育”、だよな。

そのまま、ケバ三人衆はどこかに行ってしまった。

仕方ないので散らばった残飯は一人で片付ける。  
嗚呼、MOTTAINAI。ごめんねマータイさん。

その時、

誰かが僕の目の前に立った。

そしてしゃがんで顔を覗き込んでくる。

ん、誰……？

「大丈夫か？」

降ってきたのは低い声。

……予想が外れた。九十九さん辺りが来ると思ったんだけど。  
見回すと2人は居ない。あー…図書室ね。

くそつ、男か。しかも結構普通の男子である。  
女装が似合いそうだとか、男装の麗人……的な展開も望めな  
いただの一般人。<sup>ハンビ</sup>

「はあ……」

思わずため息。

「……なんで人の顔を見てため息をつくんだ？」

ん？ああごめん。つい。

「お前……見た目と違っていい性格してんな……」

む……失礼な。というか何の用？

「あ？ああ、一応片付けるの手伝おうかなと思って」

ほえ？何で？

「何でってそりゃ……困ってるっぽかったから……」

……僕を助けてもフラグは立たないよ？ベーコンレタスは無理だから。

「……何の話をしている。何の！」

え？だから、“ヤマなし” “オチなし” “意味深長” の頭文字が  
Dデーな話。

「……お前、思いつきで喋ってるだろ」

あ、分かった？

「……疲れる。こんなヤツの相手を水無月はしてたのか？」

その言い方は凄く失礼……はっ、これは！？

その時僕の高感度リーダーが作動した！アンビバレント！

「君、水無月さんが好きだね？」

「……………なっ！…！」

そう告げてやると、ガツシャーン！とせつかく集めたお弁当をまた派手にひっくり返しやがった。あーもう、また拾い直した。

……………しかしまあ、図星のようだ。我が百発百中の直感が告げている。

コイツからは……………ラブ臭がする！

「…で、どこが好きなの？少年」

ニヤニヤしながら聞いてみる。「他人の」恋バナほど面白いものはないよね。

僕は面白いものが大好きなもの。

「何で急にそんなオッサンみたいなノリで話しかけてくれた！つか、好きじゃねえし！」

「あれま、残念」

一途に思いを寄せるけど気づかれないっていうポジションは、女性から人気でるかもよ？

「……………そんな哀れみに満ちた人気はいらねえ」

「あ、そう?」

はあ、やっぱり残念な子だ。

「残念なのはお前の頭だ」

あらかた片付け終わって一息つくくと、ちょっとお腹が空いている事に気づく。

……もうちょっと食べておけばよかった。

と、思ったら目の前に菓子パンが差し出された。

???

「何のつもり?」

「何でそんな警戒心全開なんだ?人の好意くらい素直に受け取っておけばいいのに」

苦笑いしながら、「彼」はパンを机においた。

「本当に“好意”?」

まだ疑ってみると、ちょっと不機嫌そうな顔になる。

「疑り深いな。そんなんじゃ友達出来ないぞ?」

「……いじめを黙って見てるような友達はいらない」

そう言つと、ピタッと“彼”の動きが止まった。

そう。これは最初からシリアスパートだから。

「……………水無月か」

「あ、さっきも思ったけど呼び捨て？仲良いの？」

「……………そういう訳でもない。ただの、片想いだ」

そう言った時の横顔は切なくて、哀愁すら感じさせるものだった。  
わお、第二の氷川きよし？

「お前の中では哀愁を漂わせてる人間って、氷川きよしなのか？」  
「だって演歌の人ってそんな感じがしない？」

どンドンポップスとかのジャンルに押されて消えていく感じとか。

「あ、そっちの哀愁かよ……………。マジの方じゃねえか……………」

???何で眉間を痛そうに押さえるの？

「で、何かコメントは？」

弁明を聞こうか。

「それについては……何も言えねえよ。見て見ぬフリも悪いのはわかるが俺もヒーローじゃない」

「標的が自分に向いたらたまったもんじゃない？」

「……そういうことだ」

「ふーん……」

まあ、予想通りだ。

「じゃ、いいよ。あー、パンありがとう」

パンは有り難く貰っておこう。が、そこでパンを見て驚く。

メロンパンとチョココロネ、だと！？

コイツ……出来る！？

このチョコイスが偶然なら相当な奇跡なんだけど。

軽く感動しながら僕はそのままパンを食べようとした。

「……ちょっと待て」

いそいそと食べようとしたら、怖い顔をした彼に遮られた。

「何？まだ何か用？」

「お前……だから今日は水無月と一緒にいないのか？」

「……………は？」

何を言ってるのこイツ。

という目で見つめたら、バツの悪そうに言葉を繋ぐ。

「だから！水無月がいじめられてると分かっってお前は態度変えたのか、てことだ」

「……………ああ、そういうこと」

言いたいことがやっと分かった。しかしまあ、ふーん…………。本当に惚れてるらしいねこの彼は。

「どうなんだ？」

真剣なまなざしで射すくめられると、なんだかやつぱり居心地が悪いな。

どうやったって僕は真剣にまだなれないし。飄々（ひょうひょう）と受け流しては彼に悪いし。

どげつしよげつねえ…………。

「……………違うよ。というより逆だから」

「逆？」

「君は知らなくていいんだよ。君は“最後”でいい」

「？」

頭にハテナが浮かんでるのがよくわかる。

悩んだ末に出した答えだけど、まあ我ながら謎めいているのは心苦しい。

だけど、

簡単に分かってしまうなんて、それじゃあ『お話』としてはつまらないよね。

「わからないなら今はいいよ。……どうせまた後で話すことになるし」

「??？」

まだまだ彼のクエスチョンマークは解消されそうにないね。

「ほら、呆けてないで次の授業の準備したら？」

「あの……その……」

そう促したら、なんだか尻すぼみな声が追いかけてきた。

「……何？」

「お前……名前は？」

「…………は？」「は？」

思わず頭に浮かんだ通りの言葉が出てしまった。

不覚だ！このポジションは水無月さんのとこなのに。

「昨日自己紹介したよね？」

「……覚えてないし。だから聞いてるんだけど」

……呆れた。まあ、ある意味おもしろいんだけど、僕は基本的に馬鹿は嫌いだ。あ、口に出しちゃった」

あれまあ、失言だね。“なんとか還元水”並みの失言だよ。

「……わざとだろ」

「あ、分かった？」

まあ……完璧な馬鹿ではないようだね、彼は。

「そりゃどーも……。それで名前は……って思い出した、綾波だ！」

「そう、そりゃよかったね」

……なんか相手にするのもう疲れたかも。

「あ、そうだ俺の名前は……」

「僕は君の名前を知ってるからいいよ言わなくて」

自己紹介なんてむず痒いことおちおちとやってられないでしょ？  
それにめんどくさい。

しかも君の名前は出す必要はないし。

知ってるもの。僕が。

“彼”にはそれで十分だと思わない？

最後まで不思議そうな、というより若干警戒したまま彼は自分の席、及びその周辺のコミュニティに復帰していった。

“ムードメーカー”

というのが彼の立ち位置だろう。ここ2、3日の観察で大体の“外面”は掴めた。

が、細かい“内面”はまだ知れないままだ。

「……まだまだだね」

僕も。

リョーマくんも？無我の境地は近いのか？

……妄言はこれくらいにして、人間観察を再開するか……。

そんなこんな考えているうちに昼休みは終わり、また授業が始まった。

別に退屈なわけではないが、興味を引きつけられるわけでもない授業を淡々とこなす。

そんな中で、ちょっと確認しようか。

## 授業中の、魔王。

「水無月さん、水無月さんってば！」

それは午後の最初の授業。食後の満腹感と、午後の暖かな日差しによって多くの学生が睡魔と戦う時間帯である。

そんななか小声で前に話しかけること数秒。ようやく水無月さんは後ろを振り向いた。

「何？……昨日の言葉私、守ってたと思うけど……」

なにやら別の心配をしているようだけど、今聞きたいのはそれじゃない。

「聞きたいことがあるんだけど」

「何？今じゃなきや駄目？」

「今がいいの。ねえ……、水無月さんって呼び捨てを許してる友達っている？」

「え……？なにそれ突然……」

「いいから答えは？」

「今は……いないけど」

「あー……うわー……」

「ちょっと、アンタ自分から聞いて来ておいてその反応は…！」  
「ストップ。静かに！先生に気づかれちゃうよ」

今は古文の鬼、菊地キクチの授業である。

“鬼”というからには怒ると物凄く怖いらしいのだが、実は涙腺がもろくて卒業式の日には毎回1人でこっそり泣いているのを同僚の先生達は皆知っている。

まあ、今は関係ないが。

「……あのさ」

「ん？」

あれ、僕の聞きたいことはもう聞き終わったんだけど。

「それって……アンタが私を呼び捨てで呼びたいってこと？」

「だ、だったら私もアンタのことを呼び捨てにしても……」

「……………はい？」

ナンノオハナシデスカ？

「……そんな急に呼び捨てにしだしたらカップルみたいに  
見られちゃうよ？」

そうじゃない？男女間で急に呼び捨てが始まったら、どっちかからの告白が成功したと思えないでしょ。

そう言つと水無月さんは

ガツチャーン！と大きな音を立ててペンケース（仮）を床に落と  
しなされた。

???今の、動揺するところなんてあつたっけ???

「大丈夫か、水無月」

菊地センサーもさっきの音には流石に気づいた様子だ。

こつこつさりげない気遣いにキュン、とくる生徒も少なくないら  
しい。

鬼の厳しさの中にチラリと見せる優しさ。

いわゆる、ギャップ萌えというやつだ。まあ、また関係ないけど  
水無月さんはまた顔を赤くしている。何をそんなにテンパってい  
るのだろう??

「えーと…そ、その……………だ、大丈夫でみゆ！」

あ……………噛んだ。

ていうか『みゆ』って…………

ヤ、ヤバい。この威力だと耐性のない人は……………！

サツと見まわすと、教室中がピンク色の雰囲気になっていた（主  
に男子）。

やっぱり顔はいいから……………かね？

「ぶ…、くふふ…」

忍び笑いが堪えられない。やっぱり最高だよ水無月さん。

「なっ、これ全部アンタのせい…!？」

「そこ、静かにしろ」

水無月さんの声が聞こえたのか、菊地センセがキラリと眼鏡を光らせながら注意してきた。

おお、確かに怖い。今一瞬後ろに“鬼”が見えたよ……。

眼鏡の菊地。

眼鏡のきち……く。

……。

「はあ。興味のない分野のネタまで頭によぎるようになると……  
アカンよなあ」

遠い目。

「何で遠くをみてるの？」

「いや、…我が身の業について考えてしまったよ…」

「??？」

そんな感じなピンクの雰囲気、午後の授業は終わった。

菊地先生は余りスムーズに授業が進まなかったせいか少し不機嫌そうだった。

しかし彼（30歳独身、一人暮らし）は自宅でハムスターを飼っていて、その話を振るといとも簡単に機嫌が良くなるらしい。

まあ、今は関係ないけど。

\*

さて、学校が終わったからには遂に放課後。待ちに待った瞬間である。

その心境は……そう、まさしくガンムを待ち焦がれるグハムさんのごとく。

あ、劇場版も応援してます。

という訳で、まだ真新しい教科書類も机に残し、教室を出た。

そこから昇降口に向かい、上履きはロッカーに入れ、スリッパ履き替えてそこを後にする。

撒き餌はこれで十分。

後は食いつくのを、

この部屋で見るだけだ。

……まさかこんなに早くこの部屋を使うことになるなんて……。少し感じ入りながら“部屋”に入る。

そこは、理科室とは違う僕の城<sup>くに</sup>。

放送室？（ツー）である。

\*

そこはちよつと入り組んだ所にある。

設計の時にわざと広く作つたらしい音楽室の防音壁の中。  
図面にはないその場所にそれはある。

広さはそれほどでもないが防音は完璧、外からの電波受信は外部にのばしたケーブルからアンテナに繋いである。  
無線RUNはないが、今のところは盗聴・盗撮施設としてだけ使つていこうかなと目下算段しています。

「さてさて、21Aのカメラは……Bの9……あ、あつたあつた」

カメラは火災報知器に似せて学校中に最近配置し終わった。  
流石に更衣室とかには置いてないけど、この学校の大体の場所は網羅している。

あ、あとグラウンドの野球部の試合が見れたり。

いろいろ楽しいことはいっぱいな部屋である。

「さて、どうかな……」

モニターに映ったその映像には特に何の異常もない。

……予想が外れた。もう終わっているかと思ったのに。

痕跡を探そうと、カメラを切り替えて視界を変えてみる、が何も  
ない。

「今日はやらないのかな？」

軽く失望しながらモニターから視界を外そうとしたとき、

“それ”は、映った。

「……………ん？」

今のは……………ピンゴ？

と、何で……………水無月さん？

「な〜にやってんでしょうね、あの狼さんは？」

まったく、計画が台無しなのだけど。

ここで出てくるなんて、もうファーストシーズンのスザク並みに邪魔なだけだ。

それか、せつかくOOダブルオーが格好いい戦闘をしている所で微妙な歌をマリナ・イスマイル唄う地味三十路姫とか。

さくらと小狼がいい感じになるうとしたときに出てくるエリオルとか。

Destinyでアスランに擦り寄るミアとか。カガリをだせよう！

何で最後にメイリンを連れてきたんだうわー！！

……取り乱した。

じゃなくて、一体全体何をやってるんだらう？

「やっぱり呼び出しからの精神攻撃アタックのコンボ？」

状況を見る限りそうだ。

何か囲まれてるっぽいし。何を言ってるかは、ボイスレコーダーは向こうだから分からないが、ピンチらしいのはわかった。

だって、“あの”水無月さんが人前であんなに顔を歪めて……泣きそうなんだもの。

ヒロインがピンチなんだから。

ヒーローなんて柄じゃないが、雑魚なヒーローをやってつけるくらいなら、

僕にだって……ね？

Suddenly, the end of story comes.  
But he is...

\*

半信半疑、だった。

何がつて？

そんなの、アイツのことに決まってるじゃない。

あの“魔王”こと、綾波ナガル。

真っ黒な服をまとった彼に、私はつい先日出逢った。

……そうか、先日なのか。もう学校生活の一部になっている気がする。

アイツは……不思議だ。

馬鹿みたいなことを言ったと思えば、急に真剣な顔でキザなことを言ったりする。

かと思えばよくわかんない言動をしたり……（ツンデレってなんなのよ……）。

はっきり言ってまだ実体が掴めない。

その本質が何なのか、解らない。

何かが希薄なのだ。彼は。

だから理解し難い。

度し難いのだ。

でも私は、理解、したい。

ん？いやそんなこと思ってない！違う、私は……私は……。

……。  
何か、一人で悩んで馬鹿みたい。

要するに、私はアイツがどうして味方をしてくれるのか、それを知りたいのだ。

そう無理に自己完結して、顔を上げる。

周りには当然ながらも誰もいない。九十九ちゃんは図書委員会で会議中だ。

アイツは授業が終わるとすぐ教室を出ていってしまった。

やっぱり、あの突拍子もない行動がよく解らない。

「はあ………」

肺から息を吐き出す。

それは重く、暗い気持ちになる動作ではなく、“自分”をまとめる効果があった。

……落ち着け、私。今までだって1人（独り）でもやってこれたではないか。

なのに1日話さない（というか避けられる）ことが、こんなにこたえるとは思わなかった。

何でだろ？他の、今までのクラスの奴らに無視されたって平気だったのに。

まるで“乙女”のようだ、と思って少し笑ってしまった。そんなもの、とうに捨てた。というか最初からない。そう、思っていたんだけど……。

「考えてたって、答えはでない……か」

九十九ちゃんに会おう。そして話を聞いてもらおう。

そう思い立って、椅子から立ち上がるうとした時、……聞こえた。

それは、女子の声。

しかもあれは“あの三人”の……！？

最低最悪のタイミングだ。

ここで鉢合わせたら……昨日の約束どころの話じゃない。

っ……！

その時、無情にも扉が開いた。

\*

「今日のアレはマジないわ。死んでくんないかな」

「だよ〜。つか本当にムカつくわ、あの2人」

「なに、まだ根に持つてるの？カレシが1人アイツになびいたくらい……」

「2人だよっ！あー、思い出してもムカつく！」

ガラッ……

「……っ！」

「ん、あつれえく？、水無月じゃん」

「マジ？ナイスタイミング？」

「……ちよっつと、話したいことがあるんだけど」

「帰る」

私はカバンをとって、足早に教室をでようとした。

……した、のに出来なかった。

掴まれた腕がいたい。コイツ…かなり本気で握ってきている。

「痛いんだけど」

「ハナシあるつつってんじゃん。聞こえなかった？」

「頭だけじゃなくて耳までワイてるからじゃない？」

「きゃは、それだったらマジウケなんですけど」

……不愉快、だ。しかし私は逃げなかった。

否、逃げられなかった。

「……離して！」

口はそう言っても、体に上手く力が入らない。ただ、何かが体の上を這い回るような、そんな気持ち悪さが体の働きを阻害する。

“これは何だ？”

「はあ？じゃ、離してやるよ。ほらっ！」

「きゃあっ！」

腕を引っ張られ強引に突き飛ばされた。  
痛い。こんな、物理的な攻撃は今までしてこなかったのに。

床に尻餅をついて頭を上げると、そこには、楽し（愉し）そうな  
顔、顔、顔。

……誰かに似ている、悦に浸った顔。

誰だっけ……？

「いいカツコだね、ア・カ・ネちゃん？」

「あれ、コイツの名前って茜だっけ？」

「ほら、前に落書きした教科書デコレーションに書いてあったっしょ？名前」

「あー、そうだっけ？」

そう言ってまた嘲笑わらう。

キヤハハハハっアハハハハハハっ

……れ。

キヤハハハハっアハハハハハハっ

……黙れ。



でも、  
“綾波”って名前を聞いたとき、どうしてか冷静さを取り戻していた。

“……どうして?”

思いを巡らそうとすると、私の正常化いへんに気づいた3人が、またあの“目”を向けてきた。

狙っている。啄むつばところを探している。

それは鷹のように凶暴で、ハイエナのように執拗で、…最低な程に下劣な視線ひくみ。

私は顔を上げた。

「なに睨んでんだよ?」

「生意気な顔ソウすんじゃないやねえよ!」

「何、その目。逆らう気?」

言われて初めて気づいた。いつの間にか私もあつちを睨んでいたようだ。

そうか、私はまだ……怒れたんだ。

「つーかさ、もうまとめてやっちゃわね?」

「コイツと、あとツクモのヤツとオタクね」

「そうそう!“教育的指導”をしてあげなきゃね?」

……今までの私なら、このまま何も言わずただ黙ってこの屈辱を耐えただろう。

歯をくいしばって心をどこかに飛ばして、相手を“見下せ”ば、耐えられないこともない。

それは失うものが無かったからだ。“自分”は、いや“プライド”は独りで居れば居るほど護りやすく、癒しやすい。

しかし今は。

まだ、ぎこちないけど、忘れかけていた“友達”をやっと、やっ  
と“見つけて貰った”のに。

ここで諦めたらアイツに面目が立たない、よね？

「…………るな」

それは精一杯の反逆。

「あ？」「は？」「…………」

今の私に出来る、精一杯。

「…………私ならいい。私がム力つくなら私だけにやれよ」

言葉が、今まで溜め込んできたものが、堰を切ったように溢れだ  
した。

「でもな…………、私の友達のものには、それだけには手を触れるなあ  
っ…………！」

ビリビリと、ガラスが振動する。

喉が張り裂けるかと思った。こんなに声が出せるとは自分でも知らなかったけど。

3人は、私がそんなことを言ったのがあまりにも意外だったのか、無言で硬直している。

ねこだましを食らったような顔。

それはとても間抜けで、とても滑稽で、場違いにも笑いそうになった。

しかし、そんな“余裕”も、私にあるはずがない。

……言った。言ってしまった。どうしようかこの始末。

状況は変わらないのだ。私はひとり。相手は3人。多勢に無勢。

一対多数。言ったはいいが、どうなる……？私は。

袋小路（逃げ道なし）、か。

私は……………。

ガラッ……

その時、呆気なく扉が開いた。

そして視界に映ったのは……

“黒”



悪魔で、魔王です。

\*

「なぐにしているのかな、かな？」

にっこり。ソイツは“笑った”。

前髪で目元はよく見えないが、口は、最っっ高につり上がってるのがわかる。

嗚呼、と

私は、水無月 茜は思った。

さっき誰かに似ていると思ったあの顔は、コイツに似ていたんだ。

あの、

“悦樂にひたった”顔。

魔王

「……………ねえ？」

蛇のようになっちりとした声。

そして、ペロリと、“彼”は唇を舐めた。

言外に非難の色を込めたその声音に少しゾツとする。

この得体の知れなさは想像以上かも……………。

その印象を一変させたナガルに、あの3人は戸惑いを……、いやあれは恐怖？

を、感じているようにも見えた。

「……お前には関係ないだろ」

ぼつりと、絞り出すようにケバAが声を発した。

それによって若干（本当にほんの少しだが）場の緊張が切れる。

……普通に息が出来るくらいに、だが。

「関係？あるでしょう。ボクは彼女のトモダチですし」

ニヤリ、また笑う。

嫌な笑顔だ、と私ですら思った。

まるで人を挑発しているような、それでいて侮れない“怖さ”を秘めている……要するに“気味の悪い”笑みなのだ。

「水無月さん」

「……えっ、はいっ!？」

ここで名前を呼ばれるとは思ってなかったからびっくりした。

「君は……昨日言ったことちゃんと覚えてるのかな？」

ビクッ!?!???

あ……、あれ？怒ってる？

「えー、あーその……ちょっと考え事があったって教室に残ってたらちょっと……」

嘘ではない弁明だが、ナガルの笑顔が怖すぎてどうしてもしりすばみな返事になってしまう。

うっ…ごめんなさい。

謝るから…、だからもうちょっと黒オーラの放出を抑えて！

「まあ、いいけど」

いいのかよっ！

ツッコミそうになったが口には出さない。だって、怖いんだもん。そんな風に内心はビクビクだったけど、ナガルはあまり頓着していない様子だ。

ちよこつと顎に手をあてて、考えるそぶりを見せたナガルだったが、すぐにまたこつちに向き直って口を開いてきた。

それも凄い早口で…。

「それにしても無用心だよね。いくら僕があれだけわざとドジをやったところで水無月さんが狙われているには変わりがないのに。嫌がらせは受け慣れてるんじゃないの？それなのにグダグダと教室に残ってノコノコとトラブルに巻き込まれるなんてマゾですか？どこぞの禁書の上条さんですか？その幻想をぶち殺しましょうか？」

最後のほうは意味がよくわからなかったけど、無表情＋息継ぎなしで捲し立てられれば誰だって怖いのは当たり前だよな？

「う…ごめんなさい」

柄にもなく泣きそうになって、少しうつむく。その頭にポン、と手が乗った。

「そういうこと、気をつけるように」

あ……優しい顔だ。何なのだ、やっぱり。コイツの本質は何処にあるのだろうか？

「お前ら…何なの？」

「無視してんじゃねえよ！」

「アタシら空気、みたいなの？」

3人衆が水を差すように悪態をついてきた。せつかくナガルが頭を撫でてくれてたのに……あれ？

「な、なんで私の頭を撫でてるのよ！」

「え？ここってそういう流れじゃない？」

「だからって……」

「嫌だった？」

うっ……目に見えてシューン、とされるとちょっと良心が痛むかも……。

「嫌、ではないけど……」

ああもう、顔が赤くなるのが止められない。

それをニヤニヤしながら見てくるナガルにスツゴく腹が立つんだ

けど。

「だー!!こんなことしてる状況じゃないのに!」

そうなのだ。この状況、どう考えてもまだこっちが不利なのに。それなのにどうして“彼”は……笑っていられるの?

「確かにそうだね。じゃ、『決着』つけてあげようか?」

「……………え?」

彼のその笑顔は一層深くなって。

ナガルは舞台役者のような芝居がかった振る舞いで“黒衣”をひるがえす。

その黒い布は明るい教室の窓を覆うようにバサツと広がり、漆黒の魔王の訪れをその場の人間達に鮮烈に印象づけた。

「あ……………」

なんて、なんて気障okazたらしいのだろう。

それでいて……………なんでこんなに似合うの?

「……………こっちの世界だと決めが成功したな……………」

なんかボソボソ言っているのは別として。というかこっちの世界ってなに?

「いやいや、携帯投稿版だと無能っぷりをさらしてしまってるから深く考えなくてもいいんだよ」

「????、なんなのよもう……」

疲れたツツコミをした後に私は思う。コイツ、バカなんじゃないか？

……しかしまあ、そのバカのおかげで焼けつくような緊張感から解放されたのだけだ。

もしかして……、いや…流石にないよね……？

チラッと顔を見ると、今度はちゃんとした顔に戻っていた。

……わかんないや。コレは。

結構人の心情は推し測られる人間だと自分では思ってたけどもう駄目だ。

コイツはわからん。もうサジをなげよう。

「じゃ、気を取り直してもう一度いっちゃいましょうか」

そんな私の内心のバカ認定も知らず、ナガルは再び仕切り直す。

「君らってさ、海が好き？山が好き？」

よく分からない質問によって。

「………は？」

「何言ってるんのコイツ」

「……急に何？」

ふてぶてしい態度は超一級の3人衆。私なら3人揃っている状態のアイツらに近づくのも無理だけど……。  
ナガルに物怖じ、というものはあるのだろうか。

「いいからいいから。答えてよ」

そつうながすと、

「……海」「山」「海だろ」

あれ？ふてぶてしいけど、ちゃんと答えてくれた。何故？あんなに素直なの？これも魔王の魔力？

それに満足したかのようにナガルはさらに弾んだ声で告げた。

「ふうん……まあ、あそこにはどっちもあるし。決定だね！」

彼女らの、<sup>フィナーレ</sup>終結の宣告を。

「福島」

は？

「は？」「あ？」「はあ？」

ふく…しま？

「鈍いね。キミミラの<sup>て</sup>留置場<sup>じゆうじやうば</sup>だよ。」  
Do you understand

悪魔で、魔王です。(後書き)

黒執事アニメ二期おめでとございます的なタイトルです。それ以外に特に他意はありません。

来週からテストなのに何してるんだろつと切に思う今日の頃。

## 魔王の、正体。

「……………」

絶句、絶句、絶句。

その静寂を破ったのは、

「ぷっ……………あははははははっ！」

何言っちゃってんのコイツ。バカじゃね？」

ケバAだった。

「そ、そうだよね」

「んなこと……………あり得ねえし」

それに釣られたのか、他の2人も若干ひきつりながらそれに同調する。

そんな3人の前に立ちはだかるのは……………“魔王”

「ふふ……………」

少し、またあの“嫌な笑み”をしたナガルは懐から何やら取り出した。

アレは……………ノート？

真っ黒な、ノート。

表紙には……………Death……………ええっ!?

「違うよー？コレはただのノートだから」

いや、ナガルが持つてるとあんまりシャレに見えないんだけど…。  
さらりと受け流しながらナガルはノートをいくらか捲り、目的の  
ページにたどりついた洋だ。その視線がああ三人を射貫く。

「ケバ…いや、これは止めよう。……赤松ユカ、だっけ？」

「え……？あたしの名前……」

驚く彼女（ケバ）を尻目にナガルは問う。

「君…、昨日で万引き何回目だった？」

「なっ…！？」

は……？何を言ってるの？

「荒川エリナ。喫煙と飲酒はカメラの無いところで行ったほうがいい

「い

「っ……！……！」

“彼”はこともなにげに淡々と告げる。

「そして和月カリン。」

……うちの学園の制服を着てやる援助交際は止めて欲しいものだ  
ね

彼女達にとっての“絶対の秘密”を

「……………何で」

「ん？それは“何でいつも一緒に2人ですら知らないことを知って  
るの？”って意味の何でってこと？」

「……お前……」  
「いじめ“だけ”じゃ立証難しいし、実行犯特定しにくいから、手  
っ取り早いものないかな」って探したら出るわ出るわ……埃だらけ  
だ」

最悪だよ、とナガルは付け足す。

「……学園に、言つつもり？」

すこし間があつて、それでもケバAは顔を上げ歯を喰いしばって  
ナガルを睨み付けている。

しかし、明らかに虚勢だとわかるほど声に力がない。

それと対照的に平然としてるのはナガルだ。

さながらそれは、盤上の駒ピースが自分の想像通りに動いていくのを眺  
めるゲーム・マスターのよう……

チェック  
王手はもう済まされたのだ。

「もう遅いよ。“僕”に知られた時点でゲームオーバーだから」

後は…チェックメイトするのみ。

「だって、この学園の理事長は…僕だもの」

「は

.....?」

開いた口が塞がらない、というのを初めて体験した気がする。

「おおっ！水無月さん。最長記録更新だね」

「じゃ、なくて…ええええっ!？」

何なんだ、その衝撃の事実は！

「えー？ヒントはあげたのに」

口をとがらせてぶーたれている。いやいやそれはどういふことなのか私にはさっぱりですけど!？

「ヒント? いったい何が…?」

「ほら、あれだよ」

『 “ 僕の ” 学校だもの。』

『 いけないいけない。これはあくまで水無月さんの為で、そしてこの学校の者としての責務なのだから。』

『 「責任、かな」』

……………え？

「微妙すぎでしょ！ていうか私が面と向かって言われたのは1つだけだし…。あれでわかる人なんて……………」

「いるんじゃない？鋭い人ならキュピーンと」

「来るの！？」

はあ…、まだ頭がぐるぐるする。

なんだアイツは魔王で理事長で、魔王だから理事長？

あれ？いや……………？

「理事長だから魔王” なんじゃない？」

あ、そう！……………か？

それでいいの……………か？

「だって理事長なんて肩書きでもなきや、あんな学校改造は出来ないでしょっ？」

「……ああ、そうか」

そうか、そういうことか。

「私の名前を知っていたのも……」

「暇だったからね。全校生徒の顔と個人情報プロフィールくらいは覚えてたよ。まあ、あくまで“外面”だけだけど」

その言葉には自慢の色も、何もなかった。それが当たり前とも言いたいように平坦に言うけど、それって結構…というか、かなり凄いことだよね…？

「ちょっと待てよ」

不意に、鋭い声が出た。

「何でしょう？ケバAさん」

「お前……本当に理事長なのか？どうせ、ハツタリなんじゃねえの？アタシらを脅して何かさせるためにこんなことしてるんだろ？」

あ……そうか。

これが普通の反応か。コイツの変人ぶりを見慣れてしまうと、コイツが理事長だっという普通なら眉唾の話を何処かで受け入れてしまっ自分がある。

私は妙に得心してしまった。

「証拠を見せろ、と？」

「ああ、あたしらが納得するようなもんを……」

「そんなことを聞くってことは、君は“僕がハッタリ屋のバカで、金でも積みめば何とかなる”と、そう思ってるの？」

「……………」

無言。それが肯定の意を示した時、

「舐めるな」

一喝が、走った。

体が強張る。強い意志が、私を素通りして目の前の人間にぶつかっていく。私に直接向けられたわけでもないのに心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥る。

「君はまだ“何とかなる”と思ってるのかい？まだ“自分は悪くない”とでも？」

「……………」

いつになく厳しい口調で言われ、彼女らは口をつぐむ。その様子はまるで叱られたことのない子供が怒りを向けられて困惑しているようだ。

「僕が誰であれ、君の、キミラの行為は取り消せない」

それに、とナガルは言う。

「君、自分が好きではないでしょう?」

「……………<sup>それ</sup>其が、今の話に何の関係が…」

「つまらないんだよ。キミ」

はっ、と息を呑んだ。“それ”は少し前に私が言われたことと全く同じ言葉だった。

彼からの一方的な、冷たく鋭利な拒絶<sup>ひいて</sup>。

「何で……………オマエにそんなこと言われなきゃならないんだ!」

「つまらない人間は他の人間までつまらなくするから。……………それが理由だよ」

呟くようにそう答えたナガルは、何処か、(まったく私の主観だけど)哀しそうに見えた。

「僕は楽しいことが大好きだ。そして、楽しい人もね」

“楽しい人”。彼の言うそれはきつと、文字通りの意味ではないだろう。

話が面白くて人を笑わせる様な人ではなく、誰かにすれば面白くなくても、また誰かにとっては楽しい人。

そんな……

“誰かにとつての愛すべき誰か”

それを傷つける権利を、一体人類の誰が持っているのだろう……

……?

「君は何故こういうことをしたんだっけ？性格の相違？痴情のもつれ？嫉妬？ひがみ？」

「っ……！」

「……どうなの？」

言いくいことをスパツと言ってナガルは相手の様子を出方を伺っているようだった。

「……………！……！」

その相手、ケバAはあからさまに不愉快さを露にしている。そしてついに、

「コイツが……ウザいから。ムカついたからだよ！悪いか!？」

……っ、開き直りを！

無惨に汚されたあのペンケースが頭をよぎった私は、カツとなっ

て抗議しかけた。

しかしその前にナガルが代わりに返答をしていた。

「やっと本音が出たね。 まあ大丈夫。 キミもウザいから」

「なっ……………」

ニッコリ。それはそれは全く害意を感じさせないようで、実は害意しかない笑み。

今さら思った。

コイツはDSだ、と。

「いじめに理由をつけようとするから余計惨めだよ、キミら。人の尊厳踏みにじってたって自覚あるのかな？」

「……………ふん」「……………」

「……………キミらはやり過ぎた。処分する名目もある。あー、こういう時に言うのかな？」ソ モンよ……………私は帰ってきた！」って

「絶対違うと思う」

“ここが年貢の納めどきだ！”とかならまだわかるけど、なんだソロモンって？

……………まあ、もうこういう会話も慣れたからわざわざ聞きやしないけど。

「それで、まだ処分に異存がある人はいる？」

「……………そんなの、あるに決まってるだろ！」「っーか福島って……………」

「わけ、わかんねえし」

口々に喚き、呻き、呟く声。

……アイツらは自分が助かる道を探している。何となく私はそう思った。

「福島系列校がそんなに嫌？……じゃあ、退学にしてあげようか？」

「え？」「な…！？」「っ…！」

「これは、温情に満ちた処分だってわからない？」

万引きは一回くらいは大目に見れるけど、そう何度もされるともう君はただの窃盗犯だ」

いくら親御さんの権力を使って揉み消しても、とも言う。

「飲酒、喫煙。普通の学校なら停学で済むかもしれないけど、我が学園は名門で通っているからね。」

理事会に挙げれば処分は相当厳しいものになる」

しかも理事会は僕の思いのままだし、とも言う。

「援交は…言うまでもないね？」

「……だけど親が、親に騒がれたら学園の評判だって…」

ケバAは…、というよりあの3人衆は、もうボロボロだ。

「逆だよ。騒がれたら困るのは君らのほうだろう？」

こんな経歴が表に出れば、他のどの学校が受け入れてくれるだろうね？

だから言ってるじゃないさ。“温情に満ちた処分”だって」

「う…、う…」

追い詰めている。

ナガルが、アイツらを。

……不思議な心境だ。ここは喜ばいいのだろうか。それとも

「3人とも自宅に戻って親御さんと話をしてきたら？もう連絡は秘書に行かせたし、きつと帰りを待ちわびてるよ。

……きつと、ね？」

その時、ピルルルルと携帯が鳴った。

どうやらケバAの物らしい。それに続いて、2人の携帯も鳴り出す。

着信に映る文字は、  
「ジタク」、  
《自宅》、  
>親<

がくり、ケバAが崩れ落ちた。

それが、終幕の合図だった。

## 魔王の、正体。（後書き）

約一ヶ月ぶりの投稿です。いや文章自体はモバゲーにあるので、ひとえに私のスキル『面倒くさいことスルー』が発動した結果でした。本当に申し訳無いです。

物語のほうは結末を迎えた、と思いきや実はもう一山ありますのでしばしお待ちを。

夏休みに入った次の日から課外授業で普段と変わらない受験生の生活に絶望をぬぐいきれない今日この頃。

幕間・暗黒の、魔王（前）。

\*

「一人で帰れる？」

「大丈夫。九十九ちゃんも終わってる頃だろうから、一緒に寮まで戻るよ」

……辛い（つらい）闘い？を終えた水無月さんは、傍目からでもわかるほどシヨックを受けているようだった。

まあ無理もないが。

あの3人を、結果学校から追い出すことは変わらないし、それを彼女が重く受け止めてしまうのも仕方ない。

本当はその責を負うべきなのは僕なんだろうけど。

でも、まだ僕には『残業』が残ってるし。

「じゃあ、ね。気をつけて」

「うん。あ、その、ナ、ナガル…？」

「ん？」

その様子を見て、また赤面からの感謝の言葉がくるのかな、と思っただ。

でも……違った。

「また明日”って、言ってくれる？」

頬を染めて頼む彼女は思わず息を飲むほど美しく、

「え……？」

ああ、うん。いいよ」

彼女の背に射す夕焼けは、圧倒的な“茜”色で、

「……また明日。茜」  
アカネ

彼女の、涙まじりの笑みは、

深く、深く、深く、

ただ、僕の心に、“魔王”の心に焼きついた。

\*

「ふう……」

水無月さんが歩き去って数分。

いまだに不意打ちから立ち直れない僕がいた。

……いやあ、あれは本当に反則級だね。  
あれがデレ期ってやつなのか…。凄い。暴走した初 機ぐらい凄  
ましい。

「ホント、ツンデレっていうのは偉大だよねえ……。

そうは思わない？名無しさん？」

机の上に腰かけたままの僕は、  
不意に、

廊下にいる、……おそらく“最初から全てを聞いていた”である  
う人物に喋りかける。

「……………気づいてたのか」

ガラッと扉を開けて入ってきたのは……先刻の“少年”  
あのパンのチヨイスがナイスな、少年だった。

「当然。あ、手紙見てくれた？」

「……ああ。何の用だ？俺も忙しいから……、」

手短に、とでも言いたいのだろうか。だがそれは言わせなかった。

「忙しいって“水無月さんのストーキングに”、ってこと？」

ピキッ、と

それを言って初めて、“彼”の無然とした表情が崩れる。

……思わず口角が上がった。

ちよつとずつ、“外面”が壊れていく様は最高なのである。

「……何のことだ？」

こちらを射抜くような瞳で彼は立っている。

机の上の僕と、こちらを睨む彼のこの構図。何だか僕の方がワルモノみたいだよなあ……。

魔王に挑む勇者、みたいな？  
別にいいけど。

「とぼける気であるなら止めておいた方がいいよ。色々、小細工をしていたところはカメラの記録にあったし」

ちよつち、探してみたらすぐだ。その姿が映ったのは。

「水無月さんの机を漁っている姿も、水無月さんの寮の窓からずっと覗きをしている姿も、水無月さんの体操服をもつて何処かに行く姿も、全部バツチリだよ？」

体操服は何に使ったんだろね？

あはは、あまり想像したくないけど、まあ……そういうコトなんだろう。

「男子側を水無月さんに味方しないように統制したのも、キミだろうっ？」

間を置かず捲し（まくし）立てる。

それは単純な事実。

男子に聞き取りをしたらすぐ彼の名前が挙がった。

「……おかしいとは思ったんだよねえ。女子からは、女性の嫉妬と団結は凄いのは知ってるし、仕方ないにしても」

男子からの援護が少なさ過ぎる。

「これは一種のミステリーなんだよね。そもそも水無月さんが被害を受けるようになった一因は“男子”にあるのに、守ろうとするヤツすら1人もいない」

男子皆、とはいかなくても、

“1人もいない”という状況。

大体、いじめの主犯は女子なのにそれを男子が過剰に怖がるコト

は無いだろっし。

「彼らが怖かったのは……キミだろっし？」

“男子のムードメーカー”たるキミに標的にされたら、残りの学校生活はお先真っ暗だ」

「……………」

彼は答えない。だが、それを無視して僕は言葉を浴びせ続ける。

「水無月さんを好きだ、つてのは本当らしいけど。……好きのベクトルを間違えてない？」

「……………お前には関係ないだろ」

「それ、さっき僕がああケバっちに言ったの覚えてない？ 『僕は彼女のトモダチ』だって」

「……………」

相手の言うことに即座に反応して出先を潰していく。

それは詰め将棋にも似ている。

相手が何も言い返せなくなるように追い詰めれば、ほぼ僕の勝ちだ。

だけど……どうにも“彼”のタイプが掴みづらい。

さっきの一瞬の崩れ以降、全く隙がないのだ。

冷静？

違う。そんなんじゃない。彼の腹の中はもっとぐちゃぐちゃドロドロしているはずだ。

—途かんちがい？

違う。彼はそこまで馬鹿じゃない。

彼は……

「キミ、もしかして本気で白馬の王子様を目指してた？」

純粹きよじゆ？

「……………」

彼はまた答えない。

だが、その瞳が鈍く揺れたのを僕は見逃さなかった。

「キミは本気で“水無月さんを追い詰めて、自作自演で助ける”気  
でいたの？」

「……………」

「ぎーんねん。それ、もう達成されちゃったのわかるでしょ？言っ  
なればキミは……………」

ガタンッ！！

“それ”に続く言葉は言えなかった。

素早く間合いを詰めてきた彼に、胸ぐらを掴まれたからだ。

ふむ、直情型だったか……………。

「もしかして、妬いてる？」

「……………」黙れ

「全く。どれだけ回りくどいアプローチなんだろうね、それ」

「……………」黙れ

「好きな子を苛めるやつ強化版みたいな？それにしてもオイタが  
過ぎるよねえ」

「黙れって言ってるのが聴こえないのか！？」

ああもうキレちゃってる。煽ったのは僕だけど、もう少し落ち着  
いてくれないと話も出来ない。

首も痛いし。

「……………」胸ぐらを掴むヤツってさ、よっぽどの手練れか、ズブの素人

「って知ってた？」

「……ああ？っ、ぐふっ！」

「お腹がガラ空きなんだよね。」

「あー、鳩尾みぞおち入っちゃった？」

「お前っ……！！！」

「理事長先生に向かってお前、とは穏やかじゃないね」

「パンパンと掴まれた黒衣を払う。……シワにならないといいけど。」

「ふざけんなよ……？」

「後から出てきたくせに……お前、お前はっ！」

「“水無月さんを勝手に助けて仲良くなりやがって”って？」

「……ぎょ、ぎょ」

「それが勝手な論理だって自分でもわかってるから、そんなに歪んでしまったんだろっね」

「……ぐぎょ、ぐぎょぎょぎょ……！」

彼の口の端からドロリと赤いものが溢れる。それでいて瞳はこちらを射殺そうとしているから、相当壮絶な絵づらになっていた。

「さあ、どっつするの？これから。このまま引いてくれれば特に罰則

は与えないでおいてあげる……

……と思ったけど無理そうだ」

あから物騒だね。

バタフライナイフを常備してるなんて。

ナイフの切っ先は震えている。

だが震えていながらも、しっかりと僕に向かって鋭い殺気を放っていた。

「それで？どうするつもり？僕を脅す気なの？」

「……くそおおおおっ！……」

ひゅっ！……と、遅れてくる風切り音。

「……っ！危なっ……」

薙ぐように振るわれたナイフをギリギリで回避する。

その大振りの際に、近くにあった机を蹴った。

「ちっ！」

……へえ、当たるもんだね。

机は横滑りに彼に直撃したが、彼は頓着せず乱暴にそれを払い除ける。

ダメージは……あんまりなし？

まあ、間合いをとることに成功したけど。

……しかし、

「乱暴だね。僕、武闘派じゃないから戦闘は苦手なんだけど」

ふむ、言っても彼の瞳…結構イっちゃってる感じだから聞こえてるか微妙だけど、一応は宣言しておこう。

「『撃つていいのは、撃たれる覚悟のあるやつだけだ』って、どっかの妹萌えの皇子も言ってたけど……」

キミにその覚悟はある？

「……あの女が悪いんだ。俺は、俺は、俺は悪くない……!!」

ブツブツと、うわ言のように繰り返す彼。

……ここまで壊れてた、いや壊してしまつとは思ってなかった。嗚呼、これはもう笑って済ませられるレベルじゃない。

このまま放って逃げてても、コイツはこれから何をすることも分からないし。

「……ちよつと“痛い目”みせたほうが良いよつだね」

浅く、呟く。

そして、僕と彼はそのままにらみ合った。

下手に動けない状況。

それでいて、気を抜けば隙を突かれる状況。

先手必勝。

先に動いたのは僕だった。

幕間・暗黒の、魔王（後）。

先手必勝。

先に動いたのは僕だった。

僕は黒衣から、準備してきた“固くて黒光りするもの”を素早く取り出す。

その取り出されたものの形状に怯んだのか、彼は少し動きを止めた。  
一瞬…、たったそれだけのロス。

それでも、その動作に少し遅れただけで、彼はナイフを持って突進するタイミングにはほとんど変化はない。

だが遅いわ！

我が神速の抜“銃”術、飛天御流の前に敵はない！！！！

あの一瞬、怯んだ時間で充分だった。ぴったりと、彼の頭に狙いをつけるには。

「……狙い打つぜ！」

(\*どっちかって言うとニールの方が好きだから、セリフの感じはファーストシーズンっぽい方で)

ちょっと試ってみたかったセリフの後に、

引き金が、引かれる。

プシュッ。びちゃっ。

「は……………?」

気の抜けた音、の後に気の抜けた男の声。

出たのは弾丸……ではなく、水。

それはこちらに突進してきた彼の顔に命中したのだった。

「僕が本気で銃なんか持つてると思った？ただの水鉄砲だよ」  
おひつや

思った以上にビビってくれて助かった。そのまま猛進してこられたら当たらなかったかも知れなかったし。

「で、どう？僕の特製ソースのお味は？」

「な………、ひっ！ぐあああああああ！」

あー、少し遅れてきたか。

あまりに刺激が強いと防衛本能として神経を切るっていうし。

「あああっ！目が、目があっ！」

おお、お約束のムカだ。

……やっぱり彼、狙ってやってる気がするよね。

「お前……、何を、した……？」

悶絶しながらも彼はこちらを見ながら問いかけてきた。

凄い根性……。それ、もっと別のことに使えばよかったのに……。

「キミが被った液は普通に唐辛子とかからの抽出液だよ。  
それと、隠し味にTHE SORSEとBlairs 16 m  
illion reserveを入れたけど」

THE SORSE 710万スコヴィル（カプサイシンの値。  
タバスコが約1500〜2500）を誇るホットソース。  
Blairs 16 million reserve 文字通  
り1600万スコヴィルを誇る世界最強のソース。

\*どちらも取り扱いを間違つと死にます。21歳以下、それと日  
本では正規購入出来ません。

……さらつとした液体状リキッドタイプにするのに配合、結構頑張ったんだよね  
……。

「ねえ？ “痛い目”、みた？」

「痛い目、つていうか目が焼けるように痛てえ……………あ。ま  
…まさか、お前…その為に？」

「…………お約束つていいよね」

嗚呼、最高だ。僕的にはこのくだらないジョークは超傑作なんだ

けど。自分的には面白すぎてハラワタがよじれそう。  
クツクツクツと忍び笑いを押し殺していると、

「……どこまで、俺を馬鹿にすれば気が済むんだ……」

冷静さを取り戻した彼の、痛みと悔しさを滲ませた声が僕の“悦び”を邪魔した。

まだ彼は“勘違い”してるね。

「自分を馬鹿にされるのがそんなに嫌？キミは今まで散々水無月さんにそういう事やってきただろうに」

被害者づらすんじゃないやねえよ、と言ってやると彼は口をつぐんだ。

「彼女の願いは知ってる？『もう誰にも、私の中に入ってきてほしくない』……だってさ」

それは見方を変えると、永遠に誰とも打ち解けず、心を閉ざしたいということなのだろう。

そんなことを願うなんて“楽しくない”にも程があると思わない？

「どう？外面を削られて、キミの内面が最も傷つく事を言われて、キミの狂気を引きずりだされた感想は？」

「……………俺は……………」

うずくまったまま、彼は動かなくなった。痛いのと恥ずかしいのと辛い(つらい)のと悲しいのと様々な感情がごちゃ混ぜになった左右非対称な顔をしながら、である。

「……………キミはある意味水無月さんに似てるね」

とても不器用だ。

「きつと、素直に水無月さんの為にあの3人と闘っていたら……………僕が  
入り込んだこの場所はおそらく……………」  
かのじよのとなり

哀れな、本当に哀れな、連続殺人者ヒエロのような彼は、一番ほしかった場所を得る機会を永遠に失い、…ただ神父に語るように懺悔する。

「好きだったんだ。彼女が」

「……………」

自嘲するような言葉は、“過去形”だった。

「でも、俺にはもう無理だったんだ。……………俺は一度告白して失敗し

てしまった」

それを聞いてああ、やっぱりかと思った。

やはり君は名無しくん。

彼女にとっての“名前も知らないクラスの男子”だったわけだ。

「酷く冷たく断られたよ。……それからだ。俺がおかしくなったのは」

『これは正しく愛だ！』

『だが愛も過ぎれば憎しみに変わる！』

うん……。やっぱりハムさんのセリフって格好いいよね。

「自分でだって間違ってるのは分かった。でも……止まらなかった」

「愉しかったでしょ？ いじめは」

「……ああ」

そういうものなのだろう。

スターリンやギレンとかヒットラーとまではいわないが、支配者の気分というのはどうしても周りを見えなくする。

いつか、戻れなくなる。

いつか、やり過ぎる。

そして、そこまで行ったらもう人ではない。

ただの、ヒトデナシだ。

「それで？キミはどうしたいの？僕に懺悔をしたからって彼女の傷は癒えないよ？」

それに対する答えは早かった。

「……自主退学する。どうせ貴方もそうする気だったんだろ、理事長？」

「……………へえ？」

意外だった。

すごく意外に意外で意外だよ。

「全てを、棄てると？」

「……それだけの事をしたのは分かってる。拳げ句、ナイフまで振り回したんだ。もうここには居れない」

何だ……壊れてるかと思ったが中身はまだまだ腐ってないじゃないか。

「ふ、あは、あははははははっ！ 気に入った。気に入ったよキミのことー！」

本当は彼の言う通り、自主でもなんでもこの学園からお引き取り願うつもりだった。

でも……彼はここで潰すには惜しい。

「……キミ、語学留学の希望を出していたね？」

未来は繋げよう。  
その方がぜったいに面白い。

「あ、でも一つだけ」

ただ、過去の精算は必要だ。

そう、一つだけ。

僕が“魔王”としてではなくて、“ただ単純に彼女の友達”としてやらなきゃならないことがある。

「……」  
「発だけ殴らせてね？」

S a t a n d o n ' t h a v e t h e m e r c y .  
魔王に容赦はない。

閉幕・理科室の魔王。

\*

「まずい、遅れる……！」

寮をドタバタと飛び出した私は焦っていた。  
朝御飯すら食べてないが背に腹は代えられない。

……今日は遅れられないのだ。

昨日、お礼を言い忘れていたのもあるけど、何よりただ“彼”と  
話が出たかった。

馬鹿みたいな会話。

そうだ、こんどは九十九ちゃんも一緒に話そう。

一緒にお弁当を食べて、一緒に図書館へ行ったりして……。

昨日、ちょうどA子から国際電話が掛かってきた。

私は普段通りに話してたつもりだったが、何故かA子から「好  
きな人でもできた？」とか言われてしまった。

そんなわけない！って反論してもなかなか納得してくれなくてか  
なり困った。

どうして女の人ってあんなに恋バナが好きなんだろう？

否定するの本当に大変だった…。

廊下を曲がる。うちのクラスの担任の後ろ姿が見えたが、気にせず横を走り抜けて教室に入った。

ピタリ。

扉を開けたまま動きが止まってしまった。

窓際の一番後ろ。

その席には……誰も座っていなかったからだ。

「おい、HR始めるぞ。水無月、席につけ」

「あ……はい」

その声にようやくハツと我にかえって、自分の席に戻る。

どこか心配そうな顔で九十九ちゃんがこちらを見ていたから、ちよっと手を振っておいた。

クラスメイト達は、私のその姿を見てひどく驚いた顔をしたが気にしない。

もう、悪いことばかりじゃない。世界は、私の敵ばかりではなくなったのだ。

席に座って淡々と担任の話す事を聞く。

ケバ3人衆の系列校への転校は、ちょっととした騒ぎを教室に巻き起こした。

だがそれ以上に、A子の代わりにクラス委員長になった男子（名前にはわからないけど）に急に留学が決まったことに対しての反響のほうが大きかった。

しかし私の心はドライだ。

「……この騒ぎも2、3ヶ月したら居ないのが日常（ふつ）になって、忘れられちゃうのかな？」

A子のことを誰も話さなくなった今現在を思っ、ちょぴり切なくなる。

教室のその混乱ぶりに、担任は気圧された様子でオロオロしていたが、通達だけはキチンとしようとしたらしい張り上げた声が聞こえる。

それはさっきの2つの大ニュースに付け加えるように小さく、事務的な宣告だった。

「急なことだが綾波くんも休学することになった」

え……………？

「一身上の都合、らしい。昨日急に決まって、手続きも……………」

後の言葉は聞こえなかった。

頭が真っ白になる、というのを初めて経験した気がする。

一体それは……………

「どづいつことですか!？」

私は教室を出ようとする担任を捕まえて問いただしていた。

「詳しいことはわからない。ただ一身上の都合というだけで……………」  
「アイツは……………理事長なんだからいなくなるはずないんじゃないですか!？」

そう食ってかかると、担任は驚いた顔をして、

「水無月、お前…知ってたのか?……………なら、話しても大丈夫か」

行きかける形で止まっていた体をこちらに向けて、真剣な表情になる。

私は思わず身構えた。どんな理由があれ、このままお別れなんてあんまりだ。

そんなの“楽しくない！”って、アイツなら言っはず……

「理事長は責任を取って辞職なされた」

「なっ……！？」

絶句、啞然、呆然。

今この人は何と言った？

「ど、どうしてですか！？」

「……全て昨日理事長が決められたらしいが、『責任をとる』とのことらしい。詳しい理由は言えないが、今日伝えた転出と関係があるそうだ」

私の、せい……？

私を助ける為に責任をとった？

ナガル……。

「しかし辞職といっても……あ、おい、水無月！？」

体が勝手に動いていた。会わなきゃ、会って話さなきゃ、という  
想いだけが先行して、私はただ走り出していた。

「人の話は最後まで……ったく」

その声は私に届くことはなく。

私は走った。

走って走って走りまくった。

授業なんて無視だった。

廊下を……あれ、どっちだっけ!?

……

……

…

こっちか!

また走りだす。

授業に向かう生徒や教師に不思議そうな目で見られても気にはしない。

今はただ

\*

ガラっ…

「ナガルっ!？」

この前とは真逆の、凄い勢いで扉を開けた。

そこにいたのは、

……何故か理科室で金貼りの豪華なソファに寝転がってサンデーを読んでいる変人（注・変な人。空を飛ばないものだけを指す）だった。

……………あれ？

「何で……………？」

「それって、休学になって理事長まで辞めたって言ったからもういなくなってると思ったのに僕がいるのは何で？、っていう“何で”？」

「ナガルだ。ほ、本物？」

「本物でしょ、当然。」

まさか僕がクローンで、三番目になったとかじゃあるまいし」

綾波つちゃ綾波だけど、と呟くその人はナガルに間違いなかった。

\*\*\*

「じゃあいつたいアレは……………」

……………息を切らして水無月さんが入ってきた時は、それはそれは驚いた。

あの鬼気迫る表情は、誰もが産まれてきたことを後悔するだろう。それにしても何の話？

「ん？サンデーのこと？だって昨日は水曜日だもの」

昨日は忙しくて読むひまなかったんだよね。

マガジンも買ったのに放置状態だし…。

「ちっ、がーう！！アンタが理事長辞めたっていったから私は……」

嗚呼、そっちのことが。

「ああ、うん。辞めたよ。理事長職は」

3人の転出は表向きは何も無いようにしたけど、内輪にはきちんと説明してある。その上で、誰かがその“不祥事”の泥を被らなければ、

「示しがつかないでしょ？」

「じゃ、じゃあ……」

「すぐ副理事長になったけど」

「……………は？」

あ、啞然としてる顔だ。

まさか予期しないところで見るとは。

「知らない？こういう“形だけの責任の取り方”」

「そ、それって……………」

「給料も2、3ヶ月は返納することにしたよ。まあ、別に生活に困る訳でもないし」

“ここ”を追い出されさえされなければ、だけど。

僕、住んでるのここだし。

「じゃあ、休学は……………」

「ああ、それ？もともと授業は受けてないし、そもそも僕、受ける必要もなかったから」

期間限定だったんだよ、と言うと水無月さんはスルスルとへたり込んでしまった。

どつやら腰が抜けたらしい。

……ここは手を差しのべておいたほうがいいのかな？

「みな……」

「じゃあ……何？私の心配は全部無駄？私の頑張りは、私の心労は……」

僕のフォローを聞かないまま、ワナワナという効果音が似合う様子な水無月様。

あ、これピンチ？

「あ、あの～水無月……さん？」

「あ、あ？」

うわ、めっさ怖っ!？

「し、コメント!」

手をついてちゃんと謝ると、水無月さんはしばらくブスツとした顔を崩さなかったが、

「はあ……まったく」

溜め息、に継ぐ嘆息。

半眼でこちらを見る水無月さんは呆れている、というより拗ねて

いるような様子だった。  
ちよっと涙目だし。

「……ひとつと言わせて」

「ん？」

すう、と息を吸う音がした。

あれ？ “怒り” を押さえてる…？  
彼女は何を、言うの？

「昨日、言ったのに」

「え？」

ナンノコト？

「また……明日って……」

「あ、あー…。言ったねそついつい風に。でも結果的に破っては…」

「私は破られたと思ったの!」

もう水無月さんは完全に泣き出していた。

「…………ごめん。配慮が足りなかったね」

そのうつむいた顔を見て、状況は違っけどこの前初めてここであつた時と同じだな、と思った。

……あの時僕は、やっぱりこういう時にそっと肩を抱いてやる男がいてやった方がいいんだろうな、とか考えてたんだっけ。

思ったときには、

僕は、彼女を、抱き締めていた。

「ほら泣き止んで？」

僕はさ、ほら…………水無月さんの笑ってる顔が好きだし」

泣いている赤ん坊をあやすように背中を擦り、優しく肩から包み

込む。

ぎこちなくて居心地も悪いはずなのに、水無月さんは嫌がることもせず、ただ水無月さんがしゃくりあげる音だけが静かな理科室に響く。

“ぐす……ひっく……”

ふと、その体温を感じながら思った。

……僕は何をしてるんだろう。

この状況。

これを誰かに見られたら……

あ、鍵閉めてなかった。

気づいた時には扉は空いていて、  
そこには、

ハッとした表情の九十九さんが立っていて、

「お邪魔………しました」

「お約束！だけど今は待つて！？」

やっぱりな反応をする九十九さんを何とか引き留める。

「その…お邪魔みたい…だし…」

「いやいや、いま九十九さんが考えているような事はなにも無いで  
すよー？」

少し話しかけるだけで真っ赤にするその顔を、いつも以上に真っ  
赤にしている九十九さんに向かって精一杯の弁明。

ちょっと、頭……冷やそうか。

「ほら水無月さん。もう落ち着いたでしょう?」

「うん……。ごめんナガ……。あ」

あれ、いま九十九さんに気づいたっぽい反応?

……その時の水無月さんの顔は、それはそれは可愛らしいもので、羞恥によってみるみる赤くなる彼女の八つ当たりの矛先は、

「き……。キヤアアアっ!」

「ぐふっ!?!」

腹を……。殴打、だと……?」

伊波さんばりのボディーパーを僕にかまして、水無月さんはそのまま九十九さんの背中に隠れやがっていらっしやる。

“照れ隠しに暴力”ってツンデレによくあるパターンだがこれは

……

「自分が実害こうむるとなると、やっぱ……。無理かも」

嗚呼、頭とお腹がグルグルする。

父に、ありがとう。  
母に、さようなら。

そして全てのツンデレ好き(チルドレン)に、

「『おめでとう』」

「大……丈……夫？」

「ああ、九十九さん……。いや、何でもないよ」

おお、いけない。僕の中の何かが補完されるところだった。

それにしても。

「……水無月さん」

「う、ごめん。つい……」

この仕打ち、酷いよね。

泣きそうだよ僕は。

昨日だって“残業”まで頑張ったのに。

「だって……」

「だって？」「…だって…て…？」

だって何さ？

「私はアンタが……きなのに」

は？なに？

「だ、だから……私は……」

珍しく歯切れが悪い……。

だから何が…、あ、湯気が……。

水無月さんから立ち上るあの蒸気らしきものはいったい……!!？

「／／／っっっ！言えるかこんなこと！」

「あっ！」「……あ」

あっという間に、…いや、あっという間はあったけど、それにしてももの凄いスピードで水無月さんは理科室を出て行ってしまった。

まだ授業中なのに……。

「あ、九十九さんはどうやって来たの？」

「その…保健室に…行ってくて…」

「あー、仮病？」

「……うん」

「なるほど。……ちよいワル？」

「……え？（涙目で）」

「冗談だよ？」

\*

「で、ようやく落ち着いた？」

「……はー」

「あれだねえ。僕、思うよ。」

昨日より今日のコレの方が大変だったって」

「……ごめんなさい」

「口だけじゃ謝罪の気持ち伝わってこないね。なんか行動で示すとかないのかなあ？」

あれから4時間弱。

走り出した水無月さんはいつまでも止まらず学園を走り続け、捕捉しては見失って酷い手間をかせさせられた。

しかも隠れてるのをようやく見つけたと思ったら、僕の顔を見るとまた顔を真っ赤にして逃げ出すし（なんて失礼なんだろうね？）

そんな終わりの見えない鬼ごっここの後、ようやく理科室に追い詰めて捕獲したのがつい数刻前。

立場が完全に逆転したお説教モードに突入である。

「もうお昼休みだよ。ウキウキウォッシングな時間過ぎちゃってるよね？」

「わ、私謝ってるじゃ……」

「誠意が足りないね」

「……ごめんなさい……」

……やっべ。凄く楽しい。  
このなんつうか…言葉責め？

僕の中で何かこうキュピーンチャラララライン的な、種割れ起こった的な感じなんです。

……

……

…(二十分くらい経過)

「ま、コレくらいにしてあげようか」

「…」

水無月さんは憔悴しきった様子である。まあ、無理もない。絶えずお小言を浴びせ続けられれば誰でも参ってしまうだろう。  
……やったの僕だけ。

「……………トS……………」

へ口へ口な怨み言が水無月さんから漏れる。

「聞こえてるよ〜?」

言つと、ひっ、と軽く悲鳴をあげて水無月さんは後ずさった。  
…その反応は少し傷つくなあ…。

「……いったん、教室に戻った方が良さそうだね」

疲れてるっぽいし。

肉体的にも（走ったし）、精神的にも（けちよんけちよんにしたし）。

それになんと朝ごはんを食べてなかったらしいし。

……それであれだけ走れるとは、『ヤツめ……化け物か?』と言われても仕方のない性能だろう。

まあ、例のごとく戦力の決定的な差にはならなかったけど。

「九十九さん、付き添って連れてあげてくれる?」

コクリ、と無言で頷いて水無月さんに付き添う九十九さんはまさに長門のようで、凄くグツときたのは内緒の話である。

「今日の午前中、丸々のサボりは理事長ほくから担任くんちゃんと言っ  
つておいてあげるよ」

だから安心してお昼食べてね?と水無月さんに言うと、曖昧な笑  
みが返ってきた。

曖昧な、……柔らかな笑み。

「あ、そつだナガル……言い忘れてた」

「ん？」

理科室を出る手前、扉の近く。

そこに立った水無月さんは僕の方を見てそつ言った。

あの柔らかな微笑みのままに。

『ありがとう』

『……You・re welcome』

眼鏡を外して、

出来るだけキザったらしく言ってあげれば、

……この物語の終わりを感じて。

＊＊

2人の後ろ姿を見送り、  
僕は、少し思考する。

そして、

無言で暗幕を引き、扉の鍵を閉めた。

コーヒーマーカーの電源を入れ、カプチーノのボタンを押す。

濃厚な香りが理科室に広がるのを感じながら、流れるように作業を終えソファの上に戻る。

開くのは、マガジン。

「やっぱりネギ は面白いな…。  
魔法世界編も手に汗握るよね…」

ぶつぶつといいながら雑誌をめくる。

僕は腹這いになって足をぶらんぶらんさせながら、くつろぎを得ていた。

……ん？デジャビユ？

その時、

“ガチャガチャ”と扉が鳴った。

嗚呼、またか。

また……次のお客さんのようだ。

僕は鍵を開け、すぐさま元の体勢まで戻る。これは重要だったんだよねえ。

待ち構えてたみたいに見られたらやっぱり恥ずかしいし……。

そして、現れたのは……

「何かご用？」

僕の笑みはさらに深く。

ただ、“愉しさ”を求めて今日も理科室で新たな出会いを果たす。

その瞬間、言葉を失った。

……おお、これは……

「ぼ、ボクっ子の方ですか？」

T h i s   s t o r y   h a s   g o n e   t o   a n   e n d .  
B u t   “ S a t a n ”   i s . . . .  
f o r e v e r ?  
w h e n e v e r ?  
w h e r e v e r ?

c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
.  
.  
.

閉幕・理科室の魔王。(後書き)

終わった。終わりました。

やっとこさ、という感じなのですがいかがだったでしょうか？

振り返つてみると、エヴァとガンダムネタが多い気がします。他にも色々入りたいのはあったんですが(絶望してる先生とか...)なかなかタイミングがなく、お蔵入り?しそうな感じです。

基本、本棚を見ながらネタを考えるので途中ネタが入らない部分は電車の中で書いたところです(その逆は多分部屋)。なのでばらつきにはご容赦ください(・ー・)。

ネタで言うと、あのケバ3人の本名。一回しか出ませんでした。名字を自分が好きな漫画家さんからとったのに気づいたかたはいらっしゃったでしょうか？

我ながら微妙だと少し反省してます……。

最後になりましたが、

本当にここまで読んでいただいて感謝・感激・雨あられ、文字で表せないほどにありがとうございます。

有り難うございました!!!!!!!

続編公開中。……お暇ならどうぞよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3723/>

---

理科室の、魔王。 ~ What A Funny World! ~

2011年9月19日03時32分発行